

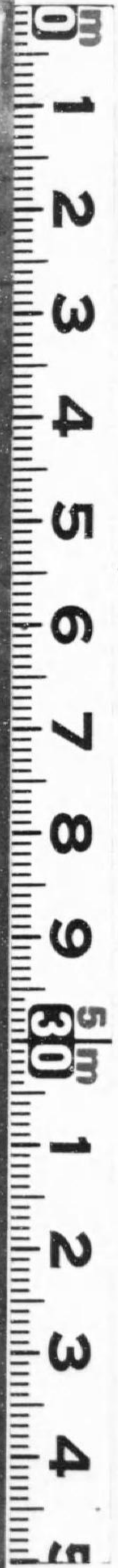
特 220

665

、まの情凡



著影等藤



始



特 220  
665



子  
竹

藤



前 か き

【古人の言葉に「順流には水の早きを知らず、逆流には水の早きを知る」と論されてある、誠に尊い味が含んでゐる、水の流れは別に違うてはゐないが、自分の立場が流れに順うてゐると、その反対に、流れを遡らうとしてゐるので、自ら感じが違ふのである。かうした事はたゞに流れ川に接した時ばかりではない、人間生活の上に味ふべき事ではなからうか。人生は楽しみごと、喜びごと、笑ふことのみなら、全く佛とも法とも知らないで、生涯を過ごさるゝのかも知れぬ。併し、實人生はさうした安價な生活は許されてない筈だ。多くの人は泣いてゐる、悲しんでゐる、悶えてゐる、苦しい問題が充滿してゐるではないか、所謂、順境の喜びは少なくて、逆境の悲みに泣くことが多いのである。殊に親を失うた子、子を逝くした親、さては夫婦兄弟、温かな家庭生活から、一人一人消え去つて、冷かな墓石の数が加つて行く、人生の悲哀に接しては、自然に佛が慕はしく、覺えずも念佛は口をついて浮ぶではないか。

自分自らがこの人生無常に接したとき、理論や理窟は全く平素の口述に過ぎないことが  
 実感さるゝ、丸裸になつたそのとき、空虚を凡情のどうする事も出来ない。  
 なかにも子を先立てた親心の悲嘆、何の眞剣さよりも眞實のものが認めらるゝ、おそら  
 くその涙は親の生涯を通じて乾かないものであらう。お念佛を他に、どうして慰め得  
 ることが出来やう。

本編はこれ迄に、かうした方々へ、お届けした貧弱な私の文字である、或は新たに涙を  
 そゝる素因を招く位が、關の山かも知れん、されど悲境に沈んだ友へ、「お心の静かなと  
 き、お讀みになつては」と差上たら、或は大悲轉普化の何かには成らうかと、茲に蒐集し  
 て世に贈らして貰ふ事にした。合掌。

昭和十六年八月十六日

藤 等 影

目 次

一 病む子の父へ……………一

二 子を逝くした若き母へ……………六

三 凡情のまゝ……………一四

四 救はるゝ者の態度……………二三

五 業 報 の 話……………三一

六 苦惱の娑婆(一)……………三九

七 苦惱の娑婆(二)……………四九

八 愛欲の廣海……………五三

九 孝道の完成……………六四

一〇 残 菊……………七三

一一 戦死者の遺族へ……………八一

一二 親 ご ころ……………九〇

一三 流轉の常相……………九五

## 一 病む子の父へ

——「親」——荒涼な世界にこの文字を発見し得たことは、私達の大なる喜びでなくてはならぬ。人間苦の暗を破つて温かい天地に憩はるゝのも、これあるがためである、私達は一切を託して安住の世界に住み得るのは、親心のはぐくみに培かはるゝからである。人の子の伸び行く後ろには、不斷に、尊い光と涙が無償に拂ひ出されて居る、何んといふ感謝すべきことだらう。併し人間生活の實際に當面した時、言ひ知れない淋しさを感じることも尠くない、或は凡ての親は子のために泣いてゐるのではないかとまで疑はるゝ、體の病ひ心の病ひ、かうした悪魔が人の子の油斷を窺うてゐるからである。この爲にか、憔悴の色を見せない親が十人の中に幾人あらう、誠に悲しい事の限りである。

北國の或都市の高等學校に奉職されてあるY氏は、宿縁の契り淺からざりしためか、私の小著「他力の眞味」を讀んで下さつたのが縁となつて、未だ一面識も惠まれないのに、こゝ十幾年間時々の消息を交換してゐる、もう數年前にもなるが、二男一女と氏等夫妻の一家族の寫眞まで送られた。今この音信を書く私の机には、Y氏の葉書とアルバム（セツセル）の小照が開かれてある。

Y氏は先年の火災に引續き色々の問題に惱まされた上に、最も力とたのむ長男某君が病ひ癪の床に就き、或醫師は絶望の診斷を與へられたとか、子を持つ親の最後の念願として、この際信仰を與へたいとの親切より病床に信仰書の一二冊をそれとはなく持ち行つたり、それと覺るやうにとの心盡しも、若い血の希望の持主であるだけ自分の重症を知る由もない模様、實際無理からんことである、どうして死ぬるなんといふ事がさう心やすう自覺出来るものでせう。何も信仰は死仕度に求むるのではないが、人間の強情さは何か逆縁にでも衝き當らねば、求道の精神などが起るものでない。實際私達が名利を憧れて人生に戯れ

て居る時は、大切な精神問題はとり忘れがちである、既に自覺せるY氏が病む子の上にての尊い贈り物を與へようとする事は、涙ぐましい親の眞實である。なか／＼世の常の親達の眞似られない事で、多くの他の家庭の上では、萬事休すといふ場合でも、場當りの慰めをいうて自他を欺く、不親切な親も少くない。肉身になればなる程、死の宣告などの出来るものでない。強がち當座のがれの慰め言葉をいふ者を叱つてもなるまい、あゝ弱き者よ、それは人間である。

Y氏が遠い土地の私に迄、病兒に諭すべき道を尋ねらるゝものは、氏が私と結ばれた小著の火災の爲に焼失したのを、こんな時にあの本でもあればと考へ出されたからであらう、斯うした氏の心根を憫んでは、唯だ一通りの見舞状だけで済まされない、他にも氏と同様の求めをなす人もあらうかと、この筆を持つた所以である。

## 三

わが信の友Yさん、私はこれ迄若い病床の人を見舞うたとき、かう云ふ事を物語つたことがある。

「人間の世界には私達の力の及ぶ事と又全く力の及ばぬ事がある、若しも自分の力の及ばぬ事に出會つたら、どうすればよいのか、それは其の事に堪能な人にお頼みするより方法はない、喩へば飛行機が便利だ無線電信が早いと云つたからとて、そんな機械を取扱ふ知識の無い者には、どうする事も出来ないぢやないですか、その時こそ、其の技能のある人にお頼みすれば、立派に用は達せられませう。今もそれと同様、死の問題、未來往生のことなんか、とても私達凡夫の力の及ぶ世界ぢやありません。生きとし生ける者で死を嫌はぬものがありませうか、併しこれだけは誰が何んと云つても、一度は私達一人々々の上に最後のその日が到来します。

九條武子さまも最後の時に申されたさうです。「泣いては下さるな、凡ての人に必ず來る日が、今日は武子に來たのですから、泣いては下さるな」何んと云ふ尊いお諭しでせう。Yさまお互に謹んで味はほうではありませんか、さあ斯うした死の問題に直面したとき、私達は何んとしたらよいのでせう。私は申します、私達の及ばぬ世界には、そこに充分の力をお持ちになる親さまが、先手をかけてお待ち下さるのであります。「われにまか

せよ必ず救ふ」かうしたお約束が既に成立してゐるぢやありませんか、私共から持かけて行く約束なら間違も仕やうかとの不安もありますが、今は大慈悲の親さまから「そのまゝ救ふぞよ」と先手のお約束でしよ、この未來往生に明るい親さまに、よいやうにとお託せする一つで、最後の問題が解決するのです。地獄ぢや極樂ぢやと繪相の上に執れてはなりませんよ。お託せした後は唯々感謝のお念佛が安々と浮び出るだけです。

## 四

Yさま、私はこれ迄重症の枕に就く人に、かうしたお話をしたことや又手紙を書いて差上たことが御座います。若しもあなたの御愛兒の耳にでも止まるやうなことがあれば、この上もないことと思ひます。くれぐれも申して置きます、病氣になつて死ぬるから、法を求むるのぢやありません、信仰は人間の生きて行く道です。人生苦の生活に若しも信仰が無かつたなら暗夜に燈火を持たないより、尙ほ不自由なんです肉體の親をもつ上に、更に更に偉大な保護に育くまるゝのが信の世界なんですと、さうお傳へ下さいませんか。

(六、二、八)

## 二子を逝くした若き母へ

□

Sさん、あんた達が永い憧れの地へ歸つて、未だ喜びもよう述べない内に、何んといふ悲しい出来事が起つたものだらう。それは慥に赴任三日目の午後ではないか、四人の子供の中でも一等頑丈な和ちやんが、水に溺れて逝くなつた、而もその日から轉校後始めて登校したといふではないか。私達はこんな凶電に接して只お互に顔を見合すのみで、何の言葉も出なかつた、是で亦あんたの體が悪うなるわいと思ふばかりだつた、兎も角と、終列車で駈付て見ると、短かい生涯の七歳の男の兒が、色黒々と肥つた體を靜に眠つてゐるやうだつた、「和ちやん、何んと云ふ姿になつたんだな」と繰言せずにもられなかつた、金釦の新らしい制服の可愛いや負ひカバンの中には其日褒めて頂いた書方が、裏まで鉛筆の力が通つた、三つ丸の誇が何者かを物語つて居る、これがこの子の遺産の一切ではない

か、あゝ泣かうにも涙が出ない、況んや親のあんた達の胸中が察せらるゝ。もうこんな事を書いて悲みを新にする事は、慎しまねばならないが、併し世にはあんた達と同じ境遇で泣いてゐる方も尠くないから、今もう少し書かして下さい。一つはまたあの子に對する凡愛の繰言なんですから。

其日、始めて學校に出てお友達が出来た嬉しさに、體の置きどころのない程に飛立つてゐたといふではないか、お晝の御飯もあんたと二人で喰べたさうだ、一度は亦衣物を濡らして歸つたのを、「川に行くなら着替させない」と注意したのに、「行きやしない」と云つて、別のサルマタを履かせて貰うたさうな、何んぞ知らん、これが親子生涯の別れで、そして未だ誰にも顔馴染もないこの子が、サルマタ一つで官舎の坊ちやんでないかと氣付かれたのも、自分の遺體の印を貰ひに歸つたやうなものだつた。嗚呼、何んとしても可愛想な事だつた。

早く逝くなる子は賢いといふ古老が語つたが、誠、和ちやんは利口だつた、随分頓智がよくて大人の驚くやうな事を云つた、時々會ふ私達にすら相當に和ちやんから教へられた事



がある、親達のあんた方には書き盡せない程の思出があらう。どうぞ取出し／＼幾久しう  
偲んで下さい。

和ちやんは、並以上の腕白さで随分皆んなが困らされたが、一面又素直でお使ひとお買  
物はこの子の受持だつた。今度の過ちも矢張、男の子の七ツ八ツは足がた迄憎らしいと云  
ふ腕白さからだつたらう、何んとしても可愛想な事をしたといふより言葉はない。

□

S 子さん、這度の出来事に直而しては、世間並に「皆んなに對する御催促でせう」「教へ  
てかへる子は知識なり」などといふ、お座なりで祭り込うとは思ひません、よく私は全  
くの他人には斯うした諦め主義を振翳して、頭からお念佛に形付けさせようと思ひました、  
誠に相濟ぬことです、他人の上の出来事なら何んとも是は付けられます、どうして／＼  
其當人が道理や理窟で解決が付きませう、無關心な水臭い心で強ゆるなんといふ事は大い  
なる胃潰れなんです。

文士芥川龍之介氏の自殺に際し、同じ體驗に泣いた平田未亡人その子さんはいつて居る、

「芥川夫人は未だお若いのだし、これから先きどんなになやみ多い日を送られねばならぬ  
かと思ふ、何んだか呼びかけてあげたい、できる事なら手を取り合つて泣いてあげたい氣  
さへいたします、お小さい方が三人もおありになるのですもの……」何んといふ親切な  
言葉だらう、こんな場合にはお談議は眞平御免／＼、なまじつかに教へたり諭されると恨  
みたくなる。道理理窟を超越した上に黙つて泣いて貰ひたい氣分がしませう、そこに人間  
味の尊さが輝いてゐるす。

何事でもさう早々に、念佛ぢや御恩ぢやお慈悲ぢやと、急速に結び付けようとするのは  
謬りである、何れはさうせないでも、泣いて泣いて、悶えに悶えた擧句は、大慈悲の御親  
に抱かれなくては濟まないのです。

廣島の人、西山松二君は二十二歳で逝くなつてゐるが「孤獨者の合掌」の中に、人間は  
絶對の孤獨者だ、只與へられたる必然の道をたつた一人眞直に受取つて行くより外に道は  
ない、たとへ私の臨終に先生が私を抱きしめてゐて下さつても、死に行く私の爲には何ん  
にもならぬ事がよく解りました」といつてゐる、又、吐血の際の所感に、「業も、如來も、

お救ひも思ふ暇もない刹那には、そんな事を思ふ餘地は尙更ありません。心が靜かに落付くに従つて、その暗に雲の間から月の光が洩れてくる様に、かすかな念佛の一道が開けて下さるだけであります。」さうだ誠にさうだ、行詰つた最後にそこに一道の光明を見出すこと、それが大慈悲の救ひに氣付かして貰ふのです。

□

S 子さん、あんたも随分これから泣かねばなるまい。時には遺つた子供の愛やら世帯にまぎれもしようが逆も胸の内からあの子を離す事は出来なからう、山形屋や鴨池なんかには當分行き度はなからう、暗い思ひのなくなる時が早う来るやうに念じましょう。併しだ S 子さん、あんたに諦めなさいとか忘れなさいとか無理な注文をしない積りだが當面の愛のみを握りしめて永遠の大愛に氣付かなくてはなりません、それは何んといつても、あんた自身が眞實の信仰に胸ふくるゝ事です、こゝに一切の問題は解決して、可愛い和ちゃんも眞に救はるゝのです、そしてこれがあんた自身の重任で家族一切の問題です、泣いたり悲しんだりした奥底に、かうした世界を發見せなかつたら、和ちゃんの死は永遠に無駄

になりますよ。

幸に私達が案じた程にあんたの胸が暗くなかつたのは、平素の聴聞がどこにか芽を出しかけた事を衷心からよろこんでゐます、この上共に法悦の泉を見失はないように。

終にあんたの披瀝の尊さを御縁に遇はせて貰ひませう。

□

「……前略……さて御出立の朝聴かして頂きました御法話に、一方ならず胸を慰さめて頂き、殊に、悲しかつたらウンと泣け、あとでお慈悲のかたちだけなりと考へさして頂きなさい。と承りし御言葉は筆にも言葉にもあらはしがたきよろこばしさ、嬉しさを味ひました。夜の枕に就く前、朝の目ざめには一方ならぬ淋しさがせまります、其度々に胸の底より思ひがけなくみ佛さまが飛び出て下され悲しさと入代つて下さる思ひが致します。

去年以來の病氣で餘程御慈悲さまにも近寄して頂きましたが、御佛前に膝まづいて合掌念佛はさせて貰ひ乍ら、何んだか今一重御佛前の障子が開き切らず、障子二重の外で

喜んでゐる心地でした、それをあの氣の早い和坊が御佛前に近寄るなり、ハツ切りと障子を両方に引開けてくれた心地が致され、この筆を持つてゐる今も、「母ちゃん、御佛前のお障子はかうして開くものですよ、そして私はかうしたよろこびに……」と、何時もよろこびの姿を見せてゐてくれる心地で御座います。

この世の事のみ執とられて何時も外出の時に、四つの洗坊せんぼうが下駄を揃へてくるゝのを喜んでゐましたのに、今度は和ちゃんが兄だけに、お慈悲の下駄をきちんと揃へて、この私へ履してくれた心地です、我子に揃へて貰うたこんな立派な嬉しい下駄をはきながら、何んでうか／＼よそみして日送が出来ませう。聴かして頂きます、よろこばして頂きます、何んだか段々身體が元氣になる様に思ひます、………どうぞ御安心下さいませ、亂筆の走りがきながら十二分にお汲取り下さいませ、又しても流れ出る悲しき涙よ、よろこばしき涙よ、さようなら

□

子に逝かれた若き母S子さん、人生は走馬燈そうまとうだ、笑つてゐる間も、泣いてゐる間も刻々

と近寄る夕暮を忘れてはなるまい、されど有難いではないか光明の世界は信ずる者の上のみ待請けて下さつてある。合掌

## 三 凡情のまゝ

一

○○さま。

もう梅雨が真近うなつたといふものか、蒸暑い日が続きます。今朝またラヂオで信州戸隠山から、小鳥の鳴聲を送つて來ました。遠い山奥からさまざまの音律が、床を出たばかりの朝の一時に聽かるゝのは感謝を拂ふ可き事です、あゝして楽しさうな小鳥の世界に誘ひ込まれて居ると、人間生活の種々相が耻かしうてなりませぬ。

更に又、私達が斯うした氣樂な思ひをして居る間も、支那の戦地に於ける將士の勞苦はどんなにあらうと考へますと、お念佛は自然と浮んで参ります。

二

○○さま。

あなたの嬢さんが、女學校三年まで上られてから、病魔の床に就かれてゐたが、あゝして一口の御法話を申上りましたが、それが始めて亦終りになつたことは、誠に悲しい娑婆の有様でした。もう彼これ丸一年になります。

寢床の上に正座してお話を待請けてゐられた姿は、今も私の臉にのこつてゐます、況んや肉身を分けた皆さまの悲嘆は、お察ししても及びつきませぬ。

○○さま。その後どうしておいでるかと思ひながら、別にお訪ねも出來ないでゐたのに、今度再び御地へ伺ふことになり、丸一年目の同じ日に、お寺の御法席を預りました。毎日あなたが末の小さい嬢ちゃんをつれて、熱心に聽聞を重ねてゐらるゝ事は、よく氣付いてゐました。逝くなられた嬢さんの臨末の模様も承り、母としての親ごゝろに御同情に堪へませなんだ。

○○さま。誠に人間心理は妙なものです、親を逝くした子は、幼少の時なら充分の自覺なく、よし年頃になつてゐても、當座は愁嘆に沈んでも、段々日がたつと忘れて仕舞ひます、一つは順當だといふ點もあるのでせうが、併し何んとしても疎遠の淺間しさがあ

ます。そこになると子女を先立てた親は、終生忘れないで子女の歳を数えてゐます、殊に女親の上に於て一層強いことと思ひます。

釋尊の御在世に、死んだ子を抱いて離さなんだ女の話があります、世尊はその子を生きかへしてやるから、未だ葬儀を出さぬ家から罌粟粒けしつぽを三つぶ貰うて来いと仰せられた。品はどこにもあるが、未だ死人の出ない家は全く無かつた。さうした事からお諭しになつたことを承つてゐます。死體こそ抱いてゐないが、亡兒を抱いて生涯泣いてゐる人は、随分多いことだと思ひます。

## 三

○○さま。

先日お目に當つた時に、別に何も承らなかつたので、御法話も致さないでゐましたが、今度のお手紙を見ますと、信仰問題に就いて相當苦しんでおいでることが知れました。實は直接御返事を差上げてよいのですが、世の中には今のあなたの胸中と同様な悶もどえの方が随分おありの事ですから、他の方の助縁にもと存じ、あなたのお氣持にお答へする積りで執筆

致しませう。

○○さま。誠に失禮とは存じますが、あなたのお手紙を拜借して、疑問のあるところを最初に讀者に知つてお貰ひします。

『……………私は一向夜が明けず毎日苦しい日を送つて居ります。先日はあれだけ、お家の御開山様の御苦勞を聽かせて頂き、皆あれは私のためでございますのに、鈍感な私には一向に反應はんおうがありません、夜となく晝となく氣にかゝりながら、今一步進んでいよ／＼眞劍になられぬ自分の心が誠にもどかしくてなりません。この空虚くうきょな心逃げたがる心、怠りがちな心、努めてむち打ちながら、御縁に會はせて頂きます。

救はれる日など、とても前途遠くな氣が致します、私のやうな者は不治の病氣にでも、取りつかれぬ限り、とても眞劍には成り切れないのではないか知れません。否不治の病に取り付かれても自分は矢張本氣になれぬかも知れませんが、自分ながら自分の心を持ってあまして、悲しいやうな氣が致します。

これではかへつて家庭の空氣を減入らせて、家族の者にも迷惑をかける』と……………

○○さま。

ようこそ率直にお氣持を發表して下さいました、併しお手紙の上では略お心持は窺はれますが、かうした御氣持を直接承ることだつたら、充分お心持を聞いてお答へが出来るのですが、どうも文筆の上ではそこに充分の御満足を與へかねます。

○○さま。こゝ迄お氣付下さる事は容易なことではありませぬ、世の多くの人は仲々この點まで進んではゐませぬ。併しこの今一步といふところで行詰つてゐる人も随分多いのです、實際こゝのところで止つた限り、捨鉢すてぼちにして置く人も多いのであります。

このあなたの眞劍になれぬといふ點ですが、どう眞劍になれぬといふのですか、自分は如來様に助けて貰ふといふよろこびが、眞劍に起らぬといふことなんですか、或は又、道を求むるといふ心が眞から起らぬといふのですか、何れにしても「これで救はれた」といふ安堵が出来ぬといふ事でせうね。

こゝの處は仲々さう容易に説明の出来るものではありません。皆が、これで救はれた、これで助かつたと、判然と得心がしたいと望むのですが、その信するといふ味ひは、手に

物を授受するやうに、出来るものぢやありません、夜が明けたといはうか、病氣が全快したというてよいか、劃期的くわくききに知られ得るものでなくて、何時の頃にか闇が無くなつたと思ふ時、既に明るくなり、病が苦にならず藥を忘るゝやうになつた頃は、もう全快してゐる時なんでせう。

○○さま。元來が凡情の愚さで充されてゐる私達です。歡べる時もあり又何んともなかつたり、昨日の私と今日の私とが、全く別物になれる位のものだつたら、何も別に超世てうせいの本願といふやうな、特別なお慈悲は生れては來ませぬ。私共がどうか成り得て助かるものなら、諸佛のお救ひで充分なんです、ところがさうした上根の機でないものですから、諸佛の悲願に漏れはてるのです、そこに彌陀の本願といふ廣大無邊なお慈悲が生れたのぢやありませんか。

先日或ところで拜見した、吉田絃二郎先生が奥さんの逝くなられた後の追想の文字に。

「昨日は悟り、今日は又迷ひ、凡夫の淺間しさ、傷心の程御憫察たまはり度し……」  
何んといふ人間味に富んだ文字でせう。

相馬御風先生が、吉田絃二郎先生を慰め、更に吉田先生が或方へその書翰の保存方を依頼された手紙の一節です。自分は言ひ知れない想ひで、その筆跡と文句にながめ入つて、自ら私達の俗世界の傷心の恥しさが反省されました。

## 四

〇〇さま。

叙上のやうに書いて來ますと、信仰といふことは助けらるゝ方の私達では、只なんともせない上に、心境の上にも何の變化も起らないものか、もう少し具體的にいふなら、人間生活の上に、何の考慮も拂ふ必要はないのかと、かう捨て遣りになつてお貰ひしてはなりません、自分が眞劍になれず、念佛報恩の思ひが薄ければ尙その上に自己の業病ごうびやうに氣付かして貰ひ、斯かる者のために御親の遺瀨ゆゑせなきみ心が加へさせられるかと、常に常に、自身の手許と同時に救済の親心を感謝さして頂くことです。

〇〇さま。あなたが何故なぜ自分は眞劍になれないかとの悶えこそは、それが早や黎方あけがたの近よつた證據なんぢやありませんか、眞夜中に前後不覺に寢て居る者には、明來あけらい闇去あんこも問題

ぢやないのです。まあそんなにあせらないで手近なところに眼をそゝいで下さい、感謝な氣持は充分に湧いて來ます、お念佛が自然に浮びます、お念佛のあるところは、御親のお懐なんです。

## 五

〇〇さま。

あなたは不治の病にでもならねば、眞劍になれぬでないかとお考へのやうですが、私達がどうかかなれるものなら、「歎異鈔」の第九章に出てゐる、唯圓坊のおたづねは必要はありますまい。

「念佛まうしさふらへども、踊躍うやく歡喜くわんぎのころ、おろそかにさふらふこと、また急ぎ淨土へまゐりたきころのさふらはぬは、いかにてさふらふべきことにて候ふやらん(中略)なごりおしくはおもへども、娑婆の縁つきて力なくしてをはるときにかの土へはまゐるべきなり……」

〇〇さま。長い御文ですからお手近にあつたら、一度靜かに拜讀して見て下さいませ、

七百年の昔に私達の總名代として唯圓坊さんが、宗祖に直接お伺ひして置いて下さつてあります。

〇〇さま。あなたがお寺参りの方々の屈託のなさうな姿を、早や解決の出来た上からだらうと、羨んでられますか、皆なみなさうばかりではありませんまい、元來型に入つた慣習聞法者も、随分あるのですから氣を付けねばなりません。祖父喚言そふくわんごんが歌うてゐます。はらのうちおつきかねて人前は聞こえた顔でござるきのどく。

問ふことをはちと思ひて問ひもせず、胸ですましてござるきのどく

〇〇さま。またどうぞ得心の出来ぬことをお尋ね下さい、さうしてあなたがお念佛をお味ひになる事が、逝くなられた嬢さんへの何よりの御供養なんです。

#### 四 救はるゝ者の態度

上

〇〇さま。「われ等は求めて救はるゝ者にあらず、召されて淨土へ行くものなり、南無阿彌陀佛とは佛の吾を召し給ふ御聲なり」

私共の愚さは自分からどうかなくて、どうかしてと、出来もしない力を出さうとしてゐるのです、失禮ながらあなたも矢張さうした氣持ではないかと思はれます。

〇〇さま。あなたが一昨年高女三年までお育てになつた嬢さんが、遂にあゝして他界された事は、他人からすらお氣の毒でお慰めの言葉も容易に出ないのです、況んや當の母御としてはどんなに御愁傷なことぞう。併し色々の事が御縁になつて、あなたが熱心に聞法の耳を澄して下さる事は有難いことです。それに、あなたがどうも眞劍になれない、不治症の病にならねば、眞劍味が出ないのではないか、よし病になつても、自分のやうな者



は、眞面目に法が求められぬのではないかと訴へて下さつたので、兎も角、私から「凡情のまゝ」と公開文でお答へして置きました、再度のお手紙には、道理は一應解つたが意がさう思はれぬ。

「全體、親さまは助けたい、私は助かり度いのですから、直ぐ解決がつきさうなものです、それが解決が着かぬのは矢張疑ひの煩惱のせいと存じます。」

「又時にはかういふ氣が致します。眞宗の御教は餘りに話がうま過ぎる、こんな無條件な蟲のよいお話しが、果して事實か知らん、……延いては佛様の存在さへ疑うてゐるのではないかと、自分を思ふやうでそれで安心が出来ぬのではないかと考へられます……」

かう率直に疑問を提示さるゝ事は、誠に有難いことで、それだけ熱心に生死出る道を求められてゐるのです。これが出まかせや一時的の心持なら、解らぬまゝで解つた顔をする人ばかり、だがあなたには閑問題でないだけ、それだけ突込んで尋ねらるゝのである。ところが斯うなると、直接面談するのは違ひ、遠方を文通ではとても充分な事を文筆に盡されない、といつてこの程度で棄てゝ置くと、能く斯うした人は、例の「人の道」とか天

理、金光といつた方面へ走らるゝのです。

私自身には未だ直接さうした方には接せないが、熱心な寺参りの人が急に足遠くなつたと思つて居ると脇道へそれてゐる事があるので、誠に大切な分岐點なんです。茲に淨土教を説く者の油断してならぬ注意が必要です。

私があなたに對する憂慮も矢張こゝを離れなかつたのです。といつて文筆の上には充分書き得ないし、面談するには遠方だし、不安の間にあなたが東京にお移りになつたきり、文通も絶えたので、何んだか教家の責任を果さない感じがしてゐました。

そのうち色々讀書をしてゐると、ふと三願三機三往生といふ宗學の扱ひを氣附いたので、茲に何んとはなくあなた疑問が窺はるゝやうな糸口を見出したのです。この三願といふことは能くお説教などで聴聞になりませう。第十八願、第十九願、第二十願のことで、弘願、要門、眞門などといふ専門語が聴かされませう、要門といふのは、聖道門から淨土門へ入る肝要な門といふ意味なんです。眞門といふのは定散自力の無効といふ要門は出たが、今一步弘願他力に入り切れないが、自力の執心をもつて他力の念佛を取扱はうとする

機類なんです。第十八の弘願といふのは、一切善悪凡夫を弘く攝するの願といふ意味で、こゝには必要な、信も行も、又目的の證までも佛の獨りばたらきで救はるゝ極致に到達するのであります。どうやら、あなたの阿彌陀さまのお慈悲が餘りに甘ま過ぎるといはるゝのは、何か注文か條件があつたら、助かる方に張合があるといふ氣持なんぢやないでせうか、そこが所謂お互凡夫の自惚こゝろで、矢張自分で何か出来るかのやうな、自力執心の迷情ではないのでせうか、さあもう一步だと考へますが、この前福島政雄先生のお話に、一を三で割れば、どうしても割切れない、それでも矢張り割らうとする心が棄てられない、そこが凡夫心のありのまゝだと諭された事があつた。又、江部鴨村氏のうたに。

「おもへば愚かなわしぢやつた、

あなたの仕事と知らないで、

出来ないことを出かさうと、

やせ腕ふつて力んてた。

X

「おもへばみじめなわしぢやつた、

あなたの荷物と知らないで、

荷ひ切れない磐石の、

下で夜ひるもがいてた。

〇〇さま。どうですこゝの氣持が解つて戴けますか。

下

〇〇さま。最近東京からのおたよりに、野戦に御苦勞下さつてある御主人の御近状なり、又御息の入學準備に病弱なため看護かたぐの東上といふことも知れ、別に私の案じてゐるやうな方面に向かないで、今も眞劍に求道のお氣持と知れて、誠に嬉しい事だと思ひました。今度の音信の中に、

「……私は今まで佛さまがお淨土へ連れて参り、そして楽しみを得させて下さるお話を聞き、誠に勿體ない事ですが、其が内心甚だ不平で御座いました。私はお淨土へなど参らせて戴かなくとも、唯苦しみを救ひ下さつたらと、そればかりで何時も頭が一杯で

ありました、なぜ佛様はそんな悠長な事をいうてゐらるゝのでありませうかと思ひましたが、やつとこの度それが私に判りました……」

〇〇さま。このお手紙で愈々あなたの今迄の氣持が私には讀めました、併し本當に會得がお行きになつたかどうか、未だ私には安心が出来ないやうです。元來、あなたの現在の苦しみは何んであるかは、私情に渡る事で私には解らない、物や名の爲に苦しまるゝのではない事は知れて居る。其他の何んであつても私が豫測することではない。假に金の無いものが富を求めるとしませう、その求むる物を與へたら苦しみは無くなるかといへば、今度は持つた苦しみが起るのです。子があつて泣く者もあり反對に無くて泣く者もある、畢竟するに苦の色が變るだけです。

浪の音きかじが爲の山ごもり苦は色かへる松風の音

元來、極樂へ參つて樂みをするといふ、そんな横着な考へ方が最初から間違つてゐるので、從來お説教の説方が、聞法遊戯の人を對手に、當座の耳さはりの良いやうな事をいつてゐるから、眞劍味が缺けてゐるのです、あなたが先きの百より今の五十といつたやう

に、現在の苦をなぜ救はれないかと不足を訴へらるゝのは無理からん事です、人間の欲望を標準に佛の世界を思考したつて解りつこなしです、同じ人間同志ですら子供と大人と、境遇の異つた者の世界は何も彼も別ですから、況んや佛の世界が凡地で窺はれ得るものですか。さうした苦惱の娑婆にある私を、救はうと呼びかけて下さるお聲こそ、南無阿彌陀佛なんです。所謂、最初に書いた、「吾等は求めて救はるゝものにあらず、召されて淨土へ行くものなり、南無阿彌陀佛とは佛の吾を召し給ふ御聲なり」

救はるゝ私にどこに力み心が入用でせう。一切は純に投託するのです、宗祖の仰せられた「……よき人の仰を蒙りて信する他に別の仔細なきなり」「地獄は一定すみかぞかし」そこ迄行つた者には、「若しや」といふ餘地は絶無なんでありませう。ところが、そんなら何もせないのが他力かと誤解しようものなら、それこそ親の眞實心を受取れぬ横着息子なんです、この點が眞宗信者の非難さるゝ點である。假にも未來はお互に、光壽二無量の佛と同體にして戴ける身でせう、「阿彌陀經」に「彼の佛を何が故ぞ阿彌陀と號する……」と問うて、彼佛の光明に限りがないからして阿彌陀と言ふといひ、更に又、「彼佛ばかり

ではない其の人民の壽命が無量だから阿彌陀と言ふ」と、無障礙の意義が知らしてある。何んといつても白道の旅をたどる行人と札ふだつ附けられたお互、佛心ぼつしんで世道人心に貢獻してこそ、宗祖の信徒として名實が相應するわけであります。

〇〇さま。まあ何んといつても、お念佛を軽々と稱へることで、易々として念佛が浮んでくれば、知らぬ間に御佛のお膝にだかれてゐることに氣付きます。御信心とやらが貰へたら喜べるだらうと、探ぐつてゐてもつかむ何ものもないかも知れません、まあこれで一應筆を擱きませう。

## 五 業 報 の 話

某夫人質疑通信の一節

『……時々前々よりお尋ね致さうと存じて居りましたが大人と子供の心境の違ふのが、どうも私には判りません。

全體私共は無始以來迷ひに迷うて居るさうですが、そんなに古い魂なら、多少なりとも進んで行きさうなものです、生れた赤ん坊は餘りにも幼稚でございますが、あの赤ん坊の姿がほんたうの魂でございますか、肉體の成長と共に智識も發達するのでせうか、死んで生れ變ればまた元の赤ん坊から始まるのでせうか、あの赤ん坊の姿がほんたうの正味の、魂の姿であれば、魂といふものは全くたわいもないものと思ひます。それなら愈々今生で救はれねば、何時また救はれるのやらと存じます。ほんたうの付焼つけやま双ふたでない魂の正體といふものはどんなものでございませう。お序ついでの節お知らせ下さいませ……。』

□  
 ○○さん。あなたが一昨年あゝして女學校在學中の嬢さんを逝くされてから、生死の問題が眞剣になり、幾度も書信の上に質問を送られ、それが誠に大切な問題である上に、他にも貴女同然な疑問に悶えてゐらるゝ方のあることを思ひ、既に『凡情のまゝ』で『絶對純信』の題下に、公開文でお答へして置きました。更に又叙上の疑問を訴へられた事は誠に有意義なことです。何んでも貴女が思ひの儘を、率直に質問して下さることは、眞に痛快です。多くの人々は遠慮勝で、充分満足もせないでゐて、一應再應中途半途で、解つたかのやうな顔で済さるゝのですがそれが矢張自己の眞剣な問題になつてゐないからなんぞせう。

あなたの場合、殊に今度の質疑などは、直接話さなければ兎ても充分御諒解の出来ることではないです。併し、遠方、お互にさうした機會は出来ないから、不充分でも一應誌上でお答致して置ませう。

□

○○さん。短かいお手紙の文字だけでは、あなたのお氣持が判然せないのですが、併し問題の骨目は誠に重要な點で

- 一、人間差別性じんげんしゃべつせいの問題
- 一、靈魂こゝろの滅不めつぷの問題
- 一、輪廻轉生りんわてんじやうの問題

かうした大切な事が含まれてゐるので、宗教學或は宗教哲學の範圍に這入らなくては、充分の説明は六ヶ敷いそんな事は學者達の取扱うてよいことでもあり、さうした豫備智識を持たない普通人に對しては、縁遠なことに終るから、今は頗る皮相な説明になるかも知れないが、至極通俗的に自分の考へを申上て見ませう。

さあ第一あなたに限つたことでもないが、世間一般、この精神とか魂といふものの考へ方が、相當淺いものではなからうか、元來、この魂と呼ぶ、一つの物の存在せるかのやうな假想を抱いてゐるのではなからうか、例へば人ダマが飛んだなどいふことも、時々耳にすること、人の目に觸れたり耳に音を聴き得るものとすれば、一の物體とせねばならず、

すればその存在が人間の體のどこにあるか、さうしたものが實在するとしたら、死後の世界にどうなるのか、まさか墓場の下に永眠してゐるとも決せられまい。それかといつて草場の蔭から見てゐると安心してゐる者もあるが、居所も持たないで天下の浮浪人としても濟むまいそれかといつて在天の靈それ髣髴として來れといつても、何れに所在するものか、そこ等の點は一般人には全く解らない。只死後の世界は幽明所を異にする。どこかにゐるものとしてゐる程度で、解らぬまゝで解つた事にしてゐる程度に過ぎない。斯うした點に古往今來智者學者の説明が加へられ併も、誰にして未知の世界の問題で、最後案を研め得ないのではないか。

かういふ風に書いて行くと、益々あなたの疑問を深めて行くことになるから。暫時そこはお預りにして置いて、今のあなたの疑問である『赤ん坊も幾度も生れ變る間には、前に習ふたり覚えたりしてゐるから、進歩しさうなものだ。それが何遍でもイロハから始めて行かねばならず。又天真爛漫な赤ん坊が本當の人間の魂なら、是非善惡の識別も出來ない魂といふものはたわいもないものだ』とのお考へ

一應考へると無理のない思方のやうではあるが、そこに色々の誤謬が潜んでゐる。元來、人間は幾度死んでも復た人間に生れて來るとお考へになつてゐはしないか。そんな者もあるかも知れません。寧ろさう出来るものなら、その方が安樂だと思ふ。昔からもそんな風に考へた學者もあるのです。併し佛さまは有無の邪見とお論しになつてゐます。則ち人間が死んだら人間に牛馬は何度でも牛馬に。犬猫は矢張犬猫に生れらるとの考へが有の見、即ち常見外道の考へだ。又、人畜一切の者は死後灰の如く風のやうに、何ものも無くなる火の消えたやうなものだと思ふものを、無の見、即ち斷見外道だと教へてゐられます。何れにしても未だ奥底へ考へを移さねばならないです。

併しです。人間に生れらるゝ種さへ蒔さへしてあれば、間違ひなく人間に生れらるゝのです。だからして生れながらにして聰明な人や、福德に富んだ人は、そこに前生の善因が芽を出したものだと思はれます。茲に於てその『人間差別性の問題』が議せらるゝのです。千萬人の人が類似の者はよしあるとしても、絶対に同一の者はない。容貌から境遇、生涯の幸不幸、一切萬事が全く別である。この解決には造物主の神を信ずる宗教などが、判断

に苦むのです。此の點になると佛教の業の思想は一段の輝きを見せてゐるのです。この事は何れ下に述るとして、今もう少しあなたのお考への上に申して置かねばならぬ事がある。

○○さん。

あなたは、今私共の目に見えた五十年の一生を、何遍でも往來するかのやうにお考へになつてはゐないでせうな。さうは出來ないのですよ。元來、私共には本質の上に十界互具といつて、上は佛界から下地獄界まで、所謂、鬼にもなれば佛にもなる素質の全部を具備してゐるのですが、六凡（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）四聖（聲聞、緣覺、菩薩、佛）といつて前の六つが迷界で、後の四つが悟界となつてゐます。その六凡の迷ひを轉生輪廻とまはり廻つてゐると示されてあります。それが誰のしわざでもない。自作自受といつて、皆な自分の、思業、思已業といつて、意で思つた思業、身と口に現した思已業が、轉々としてそれに相當する結果を招くのです。

それでもその身、口、意の行爲は、どんな微細の事でも、善惡何れも必ず結果を招くのです。元來『業』といふのは梵語のカルマを譯したので『わさ』『はたらき』の意味であ

る。その業の結果を顯すのは、時間的に四種の分類がある。順現業、順生業、順後業、不定業といふのだが、今はその説明を省略するから、誰か僧分の方から直接聞いてお貰ひたい。

□

○○さん。

あなたがお解りよい様に、古代印度の彌蘭陀王と那先比丘との問答を録した『那先比丘經』の物語を寫して置かう。

王『尊者よなにゆゑに萬人はそれ／＼相違してゐるのでせうか、即ちある人は短命なり。ある人は長命なり。ある人は病弱なり。ある人は強健であり。ある人は醜く、ある人は美しく、ある人は無力であり。ある人は有力であり。ある人は貧窮であり。ある人は富裕であり。ある人は卑賤に生まれ。ある人は高貴に生まれ。ある人は愚鈍であり。ある人は賢明である。どうして斯ういふ風に一樣でないのでせうか』

那『大王よ何故一切の果實は等しくないのでせうか、どういふ譯で、あるものは酸く。

あるものは甘く、あるものは辛く、あるものは澁く、あるものは堅く、あるものは柔かく、あるものは大きく、あるものは小さく、あるものは赤く、あるものは黄色なのでせうか』

王『それはそれ／＼異つた種子から生ずるからです』

那『大王よ、あなたのお訊ねの各人の相違も、また同様な理由で説明されなければなりません。各人の『業』が異なるから各人の『報』も異ならざるを得ないので。それ故に佛陀はいはれました。衆生はそれ／＼彼等自らの業を待つ、彼等は業の相續者である。衆生萬般の差別、一として業に由らざるはない』と

○○さん。

これで一應あなたの質問に答へた積りです。併し、實際をいふとこんな事は、不急の道草にし過ぎないので、今もう一度『求むる者の態度』を述べた『絶対純信』のあの文を再讀して見られてはどうです。あなたは未だ宗祖が地獄は一定住みかぞかしとの、あのお心持が、あなた自身の物に味はゝれないのぢやありませんか。

## 六 苦惱の娑婆 (一)

—— 山下信一郎君へおくる ——

……山下信一郎……かうしたお名前は私は今まで全く知らなかつたのです、況んや御身分や職業に附ては何の智識を持合せてゐないことは勿論です。それに急に私信や小著を上たり今またかうした公開通信を致すやうになつたのは新聞紙上にあなたに關する所感を牧曉村氏の書かれてあつて、見出しに釣込まれて讀んで行くと、人生苦に悶えを持つあなたへの同情に涙を止め得なかつた。元來私自身にも恵まれなかつた過去を持つ故と、又一つには『大無量壽經』の中の『不請之友』といふ語を、心讀して以來、どうしても苦惱を持つ人には自ら呼かける氣分が湧くのです。文字の示す通り不請は先方の請ひ求められない先です、自ら氣付いた事を自發的に行はねばならぬといふことです。今の經文の内容は佛の慈悲は救はるゝ者の請によつて始めて出來たものでない、救濟者の側から發動する親



心だといふ意味です、さうした教を信奉する者は、矢張同一の氣持を人間生活の上に實行すべきが、當然だと思ひます。

これが私の近頃の氣持であると解つてお貰ひしたい、職業意識からの宗派宣傳なんといふ執はれた考へでない事を最初に御承知置き下さい。

私は市へは様々な用事で度々出ますから必ずお訪ねしたいと思ひます、實は今すぐにもあがりたいた氣持も致します。併し、あなたに對して何も知らないまゝで、當面の事情だけ心得た今の氣分の去らないうちに、一と通り私の考へを申述べて置いて、其上で御面談した方が、双方感じが安からうと思ひ、今この通信を認めます。

山下さん、人生には不思議な程泣いてゐる人の多いことに氣付きました。原因は様々でせう、併し、苦惱に悶えて居る人の多いのは實際です。刻實すれば、除外例なしに苦しんでゐる者のみです、貧の爲に、病の爲に、家庭問題に、社會問題の爲に、所謂、四苦八苦の惱に求不得苦といつて、名を求め、利を求め、愛を求めて、それ等の欲望を充たし得ないで苦んでゐるのです、お互が日常に何の注意もなく使用して居る、娑婆といふ言葉が

それを指示してゐるのです。娑婆とは梵語で漢譯したら忍土といふので、今一段解りよくいへば、「こらえてくらせ」といふ事なんです、忍耐だとか「こらゑる」とかいへば、殘念な時の専門語と思つてゐる人もありませんが、さうではないが苦樂何れの方面も、自己の思ひのまゝに出来ない世界だといふのが、娑婆の持つ根本意義です、さうした世界に生存しながら、それと氣付かないで悶えてゐるのが、お互の凡夫生活なんです、その實相に眼覺めた世界が佛といはるゝ境界でせう。

山下さん。何んだか理窟めいた事を書きましたが、今のあなたにさうした事を申す積りではなかつたのですが、つい世の中に泣いてゐる人の多いといふことから、本來のお互の住む國土の實相を述べたのでした。實際、世の中に涙の種は絶えないのですが、中にも子を逝くして泣く人が一番多いやうです。親兄弟に別れた者は悲みもしますが、或期間を過ぎると自分勝手な理由のもとに忘れ去らうとするやうです。勿論全く忘れて了ふのぢやないが、心に油斷が出来ます。そこになると子を逝くした親は、自己自身の生涯を通して、常に子を抱いてゐます。何んといつても地上には、親の慈愛に及ぶものはありますまい。

山下さん。私は時々旅に出ますが、求道の方々から一番多く訴へらるゝのは、矢張り子を逝くした親御さんであります。昨年中にも幾人もありました。中にも唯一人兒の秀才で尋六にならうとして一時の病氣が因となり、博士や専門醫が十二人も合議した看病も効なく、僅かな間に逝くなつた、私のお悔みに行つたのは一週間目だつたが、母親は床の遺骨のそばを離れない。お花や焼香をあげたり果物お菓子を取替へ引替へ供へてゐられた。

平素全く宗教方面に縁遠かつただけ、悲嘆は一層に深かつたやうでありました。

又、或方は二十二歳の妙齡の令嬢の急死に、今更に人生の苦味のたゞならざるものに氣付かれる。親ごゝろの尊さには泣かされました。その方へのお慰めの手紙を認めつゝある處へ、未知の若い母御が當春から學齡に達した男の子を、去年の暮に逝くして急にランドセルや、學生帽を購入して、死んだ子供にかむせて泣いた。結局そんな品々や好きなチョコレートなどを棺に入れて火葬したものゝ、今は雪が積つてゐるから大地に埋めたくない、今の自分を導いてくれよとの訴へです、私の著書を読んだといふだけで、遠方から切ない胸を告げてこらるゝのです。どうして私がこんな眞剣な相談に、お座なりの返答が出来ま

せう、ただ泣きたいだけ泣いて下さいと私も共に泣きませう、これ以上は一切蛇足です、お互の愚痴は溜つたどけこぼす事です、無理に押つけてもどうにも成りません、愚痴がこぼれて空虚になると、新しい何ものかど涌いて出ますよ、それが念佛ですよ御親を知りそむる發芽ですよ。

山下さん。かうした時にあなたの記事を新聞で讀んだのです。實は昨年暮の一二ヶ月は近來にない多忙で、他出がちの日が續きましたため、あなた一家の御不幸も全く知らなかつたのです、ところが、今度牧さんの記事で始めて知つたのです。

あなた自身は有望な若い身を、一時の怪俄がもとで永い病床生活、御夫人は故あつて離縁して里方へ、たつた一人の愛嬢田鶴子ちゃんは、僅か三歳で急病死、併もその子が、利發な賢いその上可愛い生れつき、親で無うても何んで惜まずにゐられよう。私はあなたの『あゝ母なき子』パンフレットが欲しかつたが、兎も角執筆者の牧さん宛に小著を送つた處、早速取次いで戴いたと見え、お手紙と同時に私の希望してゐた御著書を送つて下さつた。

私は誠に嬉しく取る手遅しとほんたうに一字残さず涙ながらに読みました。殊にあなたが友人から贈られたマムシを死んでも喰ぬといつてゐらるゝに三歳の田鶴子ちゃんか

『トウチヤン、ヘビヲタベテ、ハヤクオキナサイ』といつた、

愛兒ゆゑに眼をつむつて、まむしの小さい切れを、口に入れました。誰か親子の至情に泣かないものがあらう、その子がたゞの一と夜で急死したとあつては、世界は全く暗黒くらやみの感があつたでせうお察しするも及びませぬ。

落合直文先生のお歌に

父上よ今日は如何にと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

實際ですな、親は弱い、そして親は強い、親は有難い。誰が親への合掌を忘れてよいものでせう。

山下さん。『あゝ母なき子』あの一篇は眞に飾りのない率直なあなたの告白です。『敢へて恥を忍んでこの一文を書きつゞける』とあるが、實際、普通には一寸發表を差控へる、御一家殊に夫婦間の御事情まで書いてゐらるゝ、それだけにあなたの氣持の眞剣さが讀ま

るゝのです。

皮相觀から視ると、病夫と愛兒を遺して里へ歸られた奥さんは、誠に無情の方のやうに考へる人も尠くなからう、併し、斯うした事は餘程の事情がそこにあることだらうから、第三者が軽々に即断してはならない事です。あなた方相互の間に於ても、自己自身の氣持通りに、對手を理解さし得るものではありません。佛教の言葉に唯佛與佛の知見といふのがあります、即ち佛と佛とでなければ實際の事は知れないといふのです。賢うても人間です、自身勝手に引づつて仕方がありません。

置去りにされたあなたも不幸です。亦置去りして行く奥さんも不幸です。世の中は斯うした不幸者ばかりが泣きあつてゐる世界なんです。あなたにはさうしたお感じは無いでせうが、世の中には是が非でも自分に同情を求めようとするものばかりです。淺ましい心の持主を凡夫と申します。

山下さん。あなたの『受難記』と申ませうか、突然の自轉車衝突から病床の人となり、妻に生別し更に一子に死別し、尙自ら病床に苦まねばならぬ。他人の事ならお氣の毒位で

片附られもしますが、當人のあなたとして、相當の不平や愚痴や腹も立ちませう、御無理もない事です。これをどうお慰めしてよいものでせう、人間の世界ではとても始末の出来る事ではありません。

凡そ世の中の事は大部分、お金で解決が付いたり、法律で一應の解決も見ませうが、仲々そんな事位で何んとも出来ない場合が尠くありません。茲に於て、どうしても私は宗教の世界へ持込まねばならぬと思ひます。さあその宗教といふ天地が、一應皆な心得てゐるやうで、實際は、徹底した安心の境に到達してゐる人は頗る稀です。寧ろ宗教なんといふ氣持を無用にしてゐる人ばかりだと思ひます。それなら寺院や教會へ接近してゐる人は、眞に解つてゐるのかといへば私は然りとは即答し得ません。

山下さん。率直な申しやうをして失禮ですがお許し下さい。あなたの宗教は何んだらうと考へました。始めに『大無量壽經』の文が書いてある、又處々に十日祭百日祭とあるから神道らしいとも考へさゝるゝ、或は家附の宗教が神道であつて、あなた自己の個人信仰といふものは、今日迄別に問題としてなかつたかも知れぬ、こんな失禮な事迄考へま

した。

兎角、儀禮を扱ふ範圍なら何んでもよろしい、今私のいふ點はそんな型の上ではない、あなた自身の心の問題です、生死を出る道です、これは考へなくてはなりません、この點安住を求め得らるゝなら、妻も子供も名譽も利得も、一切が犠牲になつても、大いな寶を獲得さるゝ事に價するのです。

世の中の人は、あなたのやうな受難に際しては運命だ天命だ、背が悪かつたと諦めやうとします、さなくば、彼が悪い、是が憎いと、罪を他に持ちかけ、甚だしきは神佛に迄不足を申します、併し、それはみな間違ひです。一切は他の知つた事ではありません、自己に原因があるので、種まきの主人は自分なんです。自己の手許をお留守にしては、問題の解決は絶対に出来ません。佛教の講釋を始める必要はありませんが、これを『業』と申します、三世因果は自作自受なり、自分になした善惡の種まきが自分に結果を受くるのである。かうした時に自己の愚しさを靜かに慚愧すると、そこから救済の光りに氣付いて歡喜のよろこびが湧き、感謝の行爲が生まるゝのであります。かうした事を私に教へて下さ

つたのが佛の教へなんです。深い哲理や宗教味の解る私ではないが、人生の實際相を見つめた時、この世界迄到達せないではゐられないと信じてゐるのです。

山下さん。説法めいた事を申して済みませなんだ、幸に病床静養の今日こそ内省の堀を深く堀下げて御覽になつては如何でせう。

御事情に同情して安價な涙で止めないで、婆心の上から斯うした筆を進めました。

その内、是非お枕邊へお訪ね致します。これを御見舞の土産に代へさして貰ひます。

## 七 苦惱の娑婆 (二)

かうした書き出しは、私が始めて、信一郎さんへの、新聞の公開文です。

未だその時はお名前も職業も知らなかつたが、自から病床にあつて動けないのに、母なき子三歳の田鶴子ちゃんが、僅かに二日の病氣で儂くなつた。愛兒の寫眞を飾つた床の前に、淋しい涙をぬぐうてゐらるゝと讀んだ。

かういふ方にこそ、「不請の友」となることが、教家本來の使命だと氣付いたからのことです。手紙の往復を交すやうになつてから、もう三年目、何十通か戴いてゐる。佛縁に恵まれなかつた人が、お念佛を味つて下さるやうになり、人一倍諦觀の世界に安住してゐられます。

信一郎さんに就ては、いろいろお話したい事がありますが、今は次の一とことを御紹介に及んで置きたい。

「只今、同朋苑、有難くいたゞきました。いつも、私のことをお心におかけ下さいまして、感謝の心で一ぱいでございます。」

病床も、もう五年目の初夏です。支那事變の起りと一しよでしたから。

癒えたらば行かんと思ふ南薩のあの町の寺を今年も思へり

實際、今年こそは〜と思ひながら、今年もまた新縁を迎へました。新聞の廣告を見てみますと、寝ながら刷れる謄寫版を発見しましたので、買つてみました。それでおもちやのやうな豆歌集を刷つてみました、御笑覽下さいませ。」

かうした手紙に添へて「歌といふよりも、矢張、短かい日記文と言つた方が、よいかも知れませぬ。寝ながら私が書いて、私が刷つて私が製本したものです。お目を汚して済みませんが……近況のつもりで」と「虎骨酒」と題した豆本に書いてある。

生命ありて二千六百年の御代にあふ永病み人のけさの喜び

樞原の宮の大太鼓いまぞ放送るわれ病床に襟を正しぬ

鳴き出でし虫に心をおきながら亡き子のことなど老母と語れり

ふとさめて亡き兒を思ふ夜の病室に静かにも聞く雪つもる音

あの丘の雪よ心して降れ母のなき吾子の新墓冷えまざるもの

吾子の墓標けふ建てにけりその石のつめたさをじつと抱ける心

頼る前に救はれてみし我なりき有難きかなただ救はるる

薬にも醫者にも捨てらる捨てられて頼りなき身に湧く力あり

永病みに効くとて遠き大陸の友の送りし甘き虎骨酒

もがく身のもがきつかれてただ受くるのみ一つある道一人ゆく道

四年ぶり生きかへりたる眼に嬉しものみな一つのみのちにして

あのころの友はおほかた大陸に働きてをり我も行ききたし

戦時下に病める我ゆゑ「出来れば代りて病まむ」と老母言ひ給ふ

病み細る手に筆重し戦線の友に慰問の文をしたたむ

なが病みの我れに氣分を問ひ給ふ老父に白髪のみどく目立てり

□

信一郎さんがこれだけに成られたことを私は心からよろこんでゐる。或頃は屋外の花を仰向けの胸に鏡を置いて寫して眺むると知らして來たこともあつた。お念佛がなかつたら、私は何を贈つてかうした方をお慰めしよう。

## 八 愛欲の廣海

□

信一郎さん、昨年十一月二十八日午後五時、唯ひとりの愛嬢田鶴ちゃんたづつが、滿二年二月月の短い生涯で、病褥びょうじよくのあなたを遺して永い眠りに旅立たれた、さうした悲しい日が丸一年目に廻つて來ましたな、矢張あなたは病床を離れ得ないで、千萬無量の思ひを抱いて迎へられたことせう。

未だその頃迄は、あなたといふ人を全く私は知らなかつたのです。それが今年一月末に新聞に牧曉村氏まきあきむらじが「あゝ、母なき子」の記事で始めて事情を知り、小著一二と共に慰めにもと記者を通してお送りし、又御同様の苦惱を持つ方の参考にもと『苦惱の娑婆』と題した公開文を書きました。それ以來あなたから戴いた音信は、封書十七通と葉書六通計二十三通それも不自由な病褥に仰向けになつたまゝお書きになるさうな。お察しするも涙で

す。始めてお訪ねしたのが今年三月五日、それから亡嬢一周忌の前日だった十一月二十七日まで、僅かに三回しかない。思ひながら御無沙汰ばかり。又そこには人間世界の悲しさ、遠美近醜えんびきんしゆうの凡情に執はれてもと、聊か考慮を拂うた迄もあるのです。併し殆んど一年近く忘れないで、あなたの不請ふせうの友となることを心がけてゐました。

それといふも、私に昨年こぞの一月始めて孫娘が生れた。赤ん坊と同居した事のない。私の家庭にこの珍客が産れたので、日夜に伸びて行く姿を眺め、段々可愛い動作をするやうになり、未だ二た誕生前だのに、女の兒だけに相當驚く程のお辯舌しやべりもする。私共の覺えられない『愛國行進曲』のそここゝや、廻らぬ舌に、「兵隊さん大好きぢや、お馬に乗つた兵隊さん、アチユナミ、シヨロエテ、兵隊さんとつとことつとこ走つてる」上手に唄ふ聲を耳にしては、愛執あいしゆは深まるばかり。あなたの「田鶴ちゃん」の寫眞とよく似た立ち姿で歩くを見ては「無事生育」を専心に保育して居ります。

あなたの病室の床に、三枚の田鶴ちゃんたがしちゃんの寫眞に、數しれぬ程のお人形をならべ、お菓子や果物を供へて、丸一年物言はぬ愛兒を唯一の慰安者としてゐらるゝ。親心の尊さをど

うして偲ばすにおられやう、あゝ、誠に人生は苦の海、涙の谷です。併し、先覺者は叫んでゐます。

「苦の海に漂へるものよ。

涙の谷に沈めるものよ。

唯だ御佛を念ぜよ。

さらば能く救はるゝことを得む。

よし、現世の海荒く、人生の谷深くとも、さかまく浪にも、岩間の草の露にも、月は等しくその影を宿すが如く。佛陀の光明は遍く十方の世界を照し、一切の人類を攝取して捨て給はず吾等の苦惱はこれによりて抜かれ、われ等の涙はこれによりて拭はれ、吾等の心の闇はこれによりて破らるゝなり」

あゝ何んといふ有難い天地でせう。私はこゝ一年間、あなたをお慰めする道は只この一筋であると奨めて來ました。

□



信一郎さん。あなたにお目に懸る直前迄は、充分あなたの心境やお感じを承つてと、考へて行くのですが、希望と春秋に富んだあなたが、仰向きのまゝの寝姿を見ては、色々あなたに話させたくないのです、自分ばかり勝手に語りしてお暇するのです。まあその内に時が来るだらうと待つてはゐるものゝ、何日も「どうですか」とお尋ねすると「段々良くなつて來ます」と答へらるゝので、今一足ふみ込んでお話も差控へたり。又御家族の方のお心持も、全く交際の浅い私には知らう様もなく、宗教の信仰といふ事などは、説聽せつとん共に相當機縁が熟さなくては調子のあふものぢやなし。お寺の者が病人さんをお見舞して、相互に感じを水臭くする場合も世間にはまゝあるのですから。併し、この點には、あなたには聊かも御遠慮せないで良いことを喜んでゐます。何れにしても病者と健康者の區別なく、人生の旅は一日一夜段々先きが近くなる事だけは、誰一人否定ひてい出來ないのですからな、

□

信一郎さん。去る二十七日「田鶴ちゃん」の一周忌の逮夜に當つてゐたので、是非お訪ねして、衣を着て讀經してあげたならあなたへの何よりのお慰めだがと考へたのですが、

それも、どうかと考へ、輪袈裟だけは持参してゐたのでした。まあ形より精神よと思ひあのまゝ、讀經したのでした。今日左記のお手紙に接して、こんなに歡んで貰へるのだつたら、最初思つた通りすれば良かったと考へ、改めて自坊から「阿彌陀經」をけふ讀誦致します。

拜啓けふはこの寒いのに、先生にはわざわざお訪ね下さいまして有難うございました。ちようど子供の一周忌を迎へますので、今日は朝から昨年しんねんのけふ正午過ぎ、急に子供が悪くなつた時の事ばかり頭に浮んで、少しも心が落つきさうでありませんでした、すつと前に先生に戴きました『親ごゝろ』といふ冊子を取り出して、靜かに讀みました。讀んでゐる内に心も漸やく落ついて参りました。そして、御文の中の「……當面の愛のみを握りしめて、永遠の大愛に氣付かなくてはなりません……泣いたり。悲しんだりしてゐる奥底に、かうした世界を發見せなかつたら、無駄になりますよ」と讀んで新たなるみさとしを戴きました。勿論、すつと前にこんな點は悟さとらして戴いてゐましたのに、また思ひ出の日になりますと、無明の心に亂される私でした。そんなところへ、先生のお訪

ねを戴き、お聲をきいた時、たゞもう『よかつた』といふ有難い氣持で一ぱいでした。それに一周忌には亡き子供にお經をあげてやりたいと思ひまして、二三日前にいろ／＼母とも相談しましたが『かねて信徒ではないところへは、お寺さんからは来て下さらないだらう』と母もいふので失望してゐました。そこへ先生が讀經して下さいましたので、本當に亡き子供はもとより。一家中救はれました。母も心から安心しました。

『田鶴子の絶望となつた。二十七日の午後三時に』ほんとはこの時永別したやうなものです。お經をあげて戴いてなんと有難いことだらう』と泣いて感謝致しました。厚く御禮申上ます。

子供の墓石の字も、下手であつても私が書いてやりたかつたので、一昨日仰向けに寝たまゝ書きました。明日建てゝやることになつてゐます。

いろ／＼一周忌を迎へると、悲みや寂しさなどに引つかゝり。やすいやうですが、靜かに先生の奥底の『……世界を……』とのお言葉を忘れず。眞實の救ひに生きたいと念うてゐます。(下略)

思ひ出深い十一月二十七日夕

山下信一郎 拜

信一郎さん。何んといふ涙ぐましい文字です。あなたがさうしてゐる、そのまゝが如来攝化の大きなお手傳ひですよ。あゝ『田鶴ちゃん』の死は全く無駄ではなかつた。あなた自身を眞實に目醒まし更に／＼あなたを通して、同憂同惱、いや、迷妄の雲深く、煩惱の霧に掩はるゝ人へ、そこに何等かの警告を與へ如来矜哀の慈悲に浴させて戴くことです。若し、です就床療病、あなたの十三年八月より、今日迄の永い間に、あなたが頑健であつて順境の日を送られたとしたら、社會的にも個人としても、相當の効果をあげられてゐやうが。靜かに自己の足跡を振かへられた時に自己のみの知る耻しさに氣付かる事が出来なかつたかも知れぬ。物は見方によつて歡びとも悔とも感ぜらるゝ事です。

信一郎さん。その日もお話したと思ふが廣島の方で春になつたら小學校へあげると、親子共に待つてゐながら、七歳の男を逝くして、ランドセルや學校帽子を死兒に買うて、キ

ヤラメルやチョコレートと共に棺に納めて火葬された。親御の感想『愛執の絆』の一節に、『去年の十月六日に死別してから。浩ちゃんはどうなになつてゐるだらう。どんなに變つてゐるだらう。會ひたい夢になりとあひ度い。いや夢ではないのだキツト會へるのだ。その時はどんなに嬉しいだらう。浩兒がどんなところに居ても、お父さんはキツト見付け出すよ、阿彌陀さまと同じお證のお力で。』

その時が待ち遠しいよ。浩ちゃん待つてゐてくれ。(合掌)

信一郎さん。三千世界に子を持つた親の心は皆な一つです、今の文章に『浩ちゃんがどんなところにゐても、お父さんはキツト見付け出すよ……』何んといふ確かな信仰發表でせう、これでなくてはならぬのです。亡くなつた者を按ずるばかりでない。自己が中心です、自己が無信仰だつたら、再び會ふことは出来ない、自分さへ證らして戴いたらその上は自由自在ぢやないですか、大切な點です、充分考慮に咨かであつてはなりません。

今年中に色々の方から著書を読みました、私の一番嬉しいことは本を貰ふことです。調園理さんは二十歳の次女教子さんを逝くして、『宗教的反省』を書いて下さつた。又小泉

義照さんは『子は逝きぬ』といふ本に十八歳の敏子を悲んでゐられます。又今前の『愛執の絆』は毛利良材さんです。又豊中の高岸晋二郎さんは「財産は失うても宅には周子がゐるから良いといつてゐられた。」

『我學校の花、日本の花、そして人類の花』

と迄、清水谷高女の校長から賞められた程だつたに、卒業はして式に出られないまゝ十八歳で逝くなつた『あくまで希望あれ』『ほゝゑみ』とは高岸氏の著書である。随分泣かされる本を澤山拜見しました。

子を逝くした親は自分の一生矢張子を抱いて居ります。あなたが丸一年愛兒の寫眞を飾つて同室してゐられるやうに、皆な心に抱きしめて愛執の絆にからまつてゐるのです。

□

信一郎さん。あなたの部屋の椽に出ると、あの秀嶺な櫻島の眺めの良さでもあなたは體の自由を缺いでゐるから、さうした楽しみもお出来でなからう。知友の方から何かとあなたを慰めてと、色々の書籍も送つて來てゐるやうです。殊に信仰方面の物も少くないやう

に思ひました。病者が百事に療法を求むるやうに精神的糧の上にも、色々のあさりのあることは無理からんことです。併し、さうした数々の種類が一つづつでも不用になり。念佛の一法で満腹して戴かれる日の早からん日を私は念願します。溺るゝものは薬をもつかむと申しますから。誰だつて捜さるのは當然です、けれど私は

ともしびを高くかゝげてわが前を行く人のありさよなかの道

といふ和里子女史のお歌のやうに。既に先覺者の燈炬を慕うて何の苦もなく進みたいと思ひます。念佛の一道が拔苦與樂の妙法と承れば、今更詮議や選擇の必要を私には感ぜないことをよろこびます。

法然上人は十五歳から四十三歳まで、一切經を五度迄繰かへし、又親鸞聖人は十九歳の磯長參籠より丸十年一生懸命に法を求めて安心されたのです。念佛が簡易だからというたやうな横着氣分から、稱へられたものでない。

只この一筋のみが私の救はるゝ道と安住されたのである。高僧知識に及びもつかぬ。お互は只唯信歸命の一つよりないと思ひます。

□

信一郎さん。最後に附記します、お里に歸つてゐらるゝ、夫人にも一度お目に懸りたいと考へてゐたが、色々差支ばかりで十一月始めに只一度お目にかゝりました。矢張それぐに寂しい思ひを抱いて、亡兒を追想してゐられます。お念佛をおすゝめして置きました。かうした、色々の苦に悩む國土、それが、娑婆なんです。お互に理窟や眞理は解つてゐても、なか／＼思ふ通りにならぬのが世相の常です、これが『業』の繫縛に苦しむ愛欲の廣海に沈淪する凡情の悲しさです。(昭和一四、一二)

## 九 孝道の完成

〇〇夫人。

始めてあなた方にお目に掛つたのは、昨年九月十九日の晩でした。

それ迄は御一家のお名前も知らなかつた私、勿論、御事情などを知る由も無かつたので、それがあゝして十年の舊知のやうな思ひの許に、安らかな一夜の宿泊に、心からなる分外の御厚遇を蒙りました。一切が逝くなられた嬢さんがお手引となつて、尊い御法縁に浴させて戴きましたことは、唯たゞ御名のお力のお蔭さまです。

慥かその時が百ヶ日が過ぎたばかりの涙の新たな時だつたと思ひます。それから其際申残したことやら、色々承はつた上に就いての所感を綴つて、お慰め申上たいと思ひながら、遂に今日になりました。けふは亦妙なことで、執筆にかゝらうと原稿紙を出した處へ、配

達を受けた郵便物の内に、あなたからのお手紙があり、取る手遅しと拜見しました。越年の御所感、親ごゝろの尊さに泣かされました。

去年の元旦は親子八人、家庭の総員が恙なくお祝ひが出来たに、愛嬢は逝く令息は入隊中、御主人が「俺は今年は年は取らぬ」と床を離れないで、それを亦、「また思ひ出してゐらるゝのと」想像して、無理にも起床を勧められなかつた、あなたの思ひ遣りも、お互に眼頭が熱うなります。それでも慰め合ふ相手のある事が、どんなに幸せか知れません。

二

〇〇夫人。

わたしがお宅に上るやうになつた動機は、考へて見るとそこに矢張色々の御縁が結ばれてあるのです。其頃、私は本願寺の御用を承つて、佐賀縣一圓を時局講演に巡回中でした。そこに前の古賀明之助、今は澤善と呼んで法師姿になつてゐらるゝ道友があります。勿論、あなた方とは政界の闘士時代からお知り合でありませう。この方が先年私の寺へ訪ねて下さつたことがあり、爾來、私が佐賀に参りますと、公私共色々お世話下さるのである。

二度目に佐賀驛で出迎へられた時に、法衣姿であつたので、餘り變化の急な爲めに驚いた位です。今度の巡回中も殆ど、大部分同行して面倒を見て貰ひました。この古賀さんの紹介で、御主人の博士が二度迄、遠方まで話を聴きにお出で下さつて、さて一晚自宅では非家内中に法話をとお約束が出来たのです。

それといふも御愛嬢照子さんが、電燈を點さうと走つて行かれた處に、平素置いてないテーブルが在り、角の方でした、か腹部を打つたのが原因で、内部の故障があつたのに氣附かず、常から頗る健康な體軀の持主ではあり、別に大した異状もなく其上若い娘盛りの元氣に、靜養に充分の注意も拂はなかつた。さて愈々氣附いた時は、もう養生の手遅れに成つてゐて、遂に二十二歳の妙齡で逝くなられた。性質も至極濃厚な誠に朗らかな時代的な娘さんで、其上容姿の美しいこと、教育も充分に施して、もう良縁次第といふ一段になつて、かうした不幸が到來したのだから、何で親御さんとして忘れられよう。

父の博士は九州知名の醫博で、獨逸に研究を積み、文字通り寸暇なき國手である。私に漏らされた述懐にも、「自分は澤山な重症者は治療してあげながら、自分の可愛い娘に油

断から、逝くしたかと思へば、もう醫者もやめようと迄考へます。」

「よし自分の妻子の病氣には、悪ければ悪いだけ觸れたくないものです。」ともいはれた。私はお答した。「それは御尤もです、未だあなたの場合には、それでもよろしいが、蓮如上人はわが妻子程不憫なるはなし、これを勸化せぬは淺間敷なりと仰せられた。私共、教育家の身で自分の妻子に法義を勸めないで、死なしたら何としませう。併し、漸死の肉身には、お前の後生は大丈夫かと、仲々容易に口には出ないものです」といつた。

## 三

〇〇夫人。

九月十八日の夕方、始めてお宅へ上りまして、御一家の子供さん方にもお目にかゝり、龍中から來られた貞包先生とも面會案内役の古賀さんと共に、鄭重な饗應をお請けしました。

御内佛の法筵の前に、何氣なく床に置いてあつた、引伸の寫眞を手にした時、一見誠に好感を呼ぶ娘さんの半身像、問はずと知れたこれが照子嬢さんだと考へられた。他人の私、

それも今始めて観たわたしでさへ、これは惜いと思ふ位です、何で今日迄慈育された親御さん方が泣かずにゐられよう。

私はこれをお内佛の前に飾つて貰うて、讀經に續いて法話を申したのです。何をどう申したか今になつては忘れましたが、話さんが爲の話でなく、確に衷心の所感をありのまゝに申上たやうに思ひます。同時にそこに聞き傳へてお出になつた、三四人の婦人方も、矢張、子を逝くして求めてゐる方々だつたさうです。

〇〇夫人。

わたしは考へた。嬢さんはそれでも幸だつたと。それはあなた方兩親の終身、嬢さんは親に抱かれてゐる事が出来たからと思ひます。勿論、肉の體はどうする事も出来ずまいが、親の温かい胸の中には寸時も離さないで抱きしめてゐるのです。そこになると親を逝くした子の方では、當時は泣きもし悲しみもします。併し、仕方はないと諦める時が來るのです。何といつても地上に於ては親が子を思ふ程、尊い事は他に全くありません。

奥さんから承はりましたネ、『この娘は人生の暗い方面は全く知らないで、一生を終り

ました。それでも、愈々駄目だと自分でも考へたのか、寝たまゝ胸の上に合掌して、お母さんこれで宜しいかと尋ね、……それでよい……と答へると、「それではお先へ失禮致します」と挨拶して逝きました。』  
人の母としてどうして忘れられませう。

四

〇〇夫人。

こゝです。大悟一番、恩愛の涙はやがて感謝の稱名の浮ぶのは。私はこの嬢さんの死は、子として何よりの報謝を親に捧げられたものと考へます。

『父母恩重經』の中に、親の御恩の數々をお説き下さつてありますが、釋尊は何時も貧苦な者を土臺として説法あらせられます。

父母の十恩、懐胎守護の恩、臨生受苦の恩、生子忘愛の恩、乳哺養育の恩、廻乾就濕の恩、洗濯不淨の恩、嚙苦吐甘の恩、爲造惡業の恩、遠行憶念の恩、究竟憐愍の恩と數へ、更に子の忘恩我儘の下情を述べてある。

阿難尊者がこの大恩を如何にして報ずるかとの問に對し、

「親をして菩提心を啓發せしめよ」と諭されてある。

人の子の報恩の大行は、親に菩提心、即ち信仰心を起さすより大なるものはないのです。茲に於て私が嬢さんが孝道の極致を全うされたといつたのです。

## 五

〇〇夫人。

嬢さんの孝養が成就したのみではありません。博士御自身に於ても、先考に對して一大追孝が完成したと申上たい。承はるところによると、先代の親御さんは稀に見る篤信者であられたさうです。奥さん、あなたが「わたしは他宗の家に嫁入らないで幸だつた、この有難い御法を知らずに終るのだつた」と仰しやる通りあなた方御夫妻が眞にお念佛を歡んでゐらるゝ事は、先考がどんなに満足してゐらるゝか知れませぬ。

博士の今日の出世は、誠に結構です。邸宅といひ調度品といひ、實に世の人の知らない御生活です。私も隨分色々の場所やお宅へお世話になりますが、お宅さまのやうな完備し

た邸は始めてでした。私は翌朝、言ひ知れぬ喜悅に充たされました。たつた一晚の宿にすら、あんな嬉しさを感じる私です、それにあなた方はそこが平素の住宅でせう、何んといふ幸運の祝福です。先代が今迄生きてゐられたらどんなにお喜びになるか知れますまい。併しです、奥さん、唯それだけだつたら今一つ先代に充たされぬ思ひを抱かせるのですよ。それは念佛の聲です。若しかしたらこの最後の一つがあつたなら、他の一切は辛抱さるゝではなからうかと、御先代の意を忖度したいやうな氣持がします。

私は曾て或席上で言つたことがあります。

「宗教なき家庭は煖爐なき家屋の如し、信仰なき人は香なき造花の如し」と。

あなたのお宅に萬全の設備はしてあつても、御佛壇が無かつたり、九州唯一の國手であつても、お念佛の聲がせなかつたら何んで赤の他人の縁も由緒もない私が御歡待が受られます。私はさう思うて終夜念佛が浮んで止みませなんだ。其夜の法席を先代始め亡き嬢さんが、どんなに満足されたであらうと思へば私は今にも法悅のゑみを忘れません。茲に於いて嬢さんの導きは、照子嬢さんはあなた方へ、亦貴方方は先代の親御へ、孝道の完成が



出来たものとお喜びに堪へません。

みほとけの御名に引かれてこの夕

うれしく語る法のみ筵

幾久しめでそだてしこの華は

あすの照日を待たで散りしか

## 六

〇〇夫人。

悲しかつたら泣けるだけ泣いてあげて下さい。或不幸な〇〇がいはれました。

「泣くと言ふ事によつて此の何とも例へ様のない佗しい氣持を幾分充たされます。」

かうした最後にお稱名の乳房に取つくことをお忘れのないやうに、さやうなら。

## 一〇 殘

## 菊

上野菊枝女史を悼む

## 上

逝く秋に菊一輪は咲きのこり

「春の花も何時しか青葉と變り酷暑の苦みも昨日と過ぎて、朝夕の風身にしむ頃ともなれば、病葉の一葉毎に寂しさは身にせまり、過去のなつかしきそして限りなき悲しみとが、今もなほ病の床に味氣なう、ひねもすをかこち居る、私には一入の憶出となり、おく露しげき秋の夜長は我袖もぬれまさる……」

この文の主、上野菊枝女史は主人と子供の三人連れの旅よりの歸途、山陽線廣島縣中野驛附近で、列車事故の爲に遭難し、主人鹿兒島市長上野篤氏と五歳の篤孝君は即死、只一人生き遺つた夫人は腰部の骨を挫折し、人事不省のまま、廣島病院に收容され、爾來、殆ん

ど一年近く、二人の不幸を知らされなかつた。

叙上の文章は三周年の感想の一節である。その後七年忌十三年忌の其の日を迎へて感想を綴り、歌文を集めて「残菊」と題し、知人に頒たれたものである。

遭難は大正十五年九月二十三日の深夜であつた。

#### 中の一

自分は上野市長とは格別私交上関係はなかつた、併し大谷尊由師が鹿兒島別院大法要に臨場の際、市長の希望で一般聴衆の爲に、七高講堂で講演を頼まるゝので、當時布教係りをしてゐた爲め、紹介の勞を取つたので心易く應接を交へた。

夫人菊枝女史は其後指宿温泉療養中に慰問したのが縁となり、爾來、時々小著を送つたり、又先方からは賀状と暑中見舞を不缺に送られてゐた。鹿兒島の住宅が薬師町といつて甲突川向ふで餘り自分に用事の無い土地で、訪問でもする事はなかつた。ところが昨年秋季の彼岸前に、前記の「残菊」といふ歌文集を贈られたので、相當頁もあるが、一氣に讀んで、遭難以來、十三年になるに、未だ寢床住ひと知り、急に慰めてあげたくなり、先づ近

著二三冊を送り、今度市に出たらお訪ねすると通信して置いた。

當時は相當世間の話題に上り、同時に同情の涙に袖絞る人もあつたかなれど、兎角、他人のことは忘れ安いから、一應當時の概略（おぼろげ）を書いてみよう。

大正十五年九月十五日上野夫妻は一子篤孝君を伴ひ鹿兒島を發車し、歸途僅に九日目に九月二十三日午前三時、廣島縣中野驛近くに差かゝると、豪雨の爲めに小川の堤を破壊し、線路の土砂を洗ひ流してゐたのを、急行列車が下り來り、二等寢臺車が顛覆して多數の死傷者を出したのであつた、乗合した上野氏一行は遭難の厄を受けたのである、下半身に重傷を負うた夫人は、夫と子供は輕傷で他の病院に收容されたと聞かされ、或は輕快して一足先きに歸國して治療せりとか、色々に諭されて、殆んど一年に近き間、不安の中に日を送つてゐたが、偶手紙を出しても返事もなく、見舞品の半分を子供にと託しても、戸口の外へは持つては出るが、嘔り泣きの聲がするやら、附添や看護の人々の上、どこともなく合點の行かぬところがあり。

愈々事實の儘を聽かされたときは、永い間半信半疑の謎が解けて、言ひ知れぬ悲哀を感

じさゝれた事であつた。爾來、幾度か絶望の淵に沈み死にまさる事なきを考へさゝれたか  
 知れない、併しこの上に老年の舅しゅうとに苦勞をかけては濟ぬと努めたと言つてゐらるゝ。

吾子のみ連れて行きます御旅路寒けき路のはろくくとみゆ

ひと日毎悶えの心高まりぬ癒ゆるともなく深傷みつめて

生か死か我行く道の迷ひ雲頼む光も見えずなりたり

一年三ヶ月目に再生の廣島を立つて歸國の途に就いた。誠に感慨の深いものがあつたら  
 し。

いざさらば歸らむ冬にふるさは裏枯れぬらむ菊の一もと

歸り行く冬のふるさとしかあはれ心みだるゝ千々の思ひに

神かけて祈りし歸國のよろこびもわれにのろはし獨り生くれば

初めて墓參

十二月二十三日

奥津城へ自ら花も手向け得ず不具と云ふ名のあはれなるかな  
 立ちならぶ御墓の前に現世うつしよの宿命身にしみて堪へがたきかな

## 中の二

自分が久々に女史を訪うたのは昨秋十月三日であつた、其日は豫定講演が防空演習の爲  
 め、宿坊に差支が出来、終日市の旅館に遊ぶことになつた。加ふるに非常な豪雨で他にど  
 うするといふ用事もなし、今日こそはと女史の住宅を訪うた、義弟一家と同居し別に病人  
 に便利なやうに設備された一室、殊に座敷續きに入浴の出来る風呂も設けられて少女相對  
 に和やかな永い日を床の中に送つてゐられた。先年會うた時とは上半身も肥滿して、血色  
 も頗る良い、椅子もあつたからどうかして掛けらるゝこともあらうが、多くは寢床の上ら  
 しい、訪客も少なからうし、殊に方面の違つた自分の訪問を、心から歡ばれたらしく、四  
 方山の話から修養や信仰に移り、殊に「殘菊」の内容に就いて色々話合つた。

總てが書かんが爲に書いた文字でないだけに、大に敬服する言葉が少くない。

「泣くまい、歎くまい、日頃は堪へくゝてゐるだけ、止むる事の出来ない涙は、忽ち兩  
 の袖を搾しぼるばかり、私は眞實弱い女なので御座います。

泣くと言ふ事によつて此の何とも例へやうのない、佗しい氣持を幾分充すとでも申しま

せうか、私は總てを諦めましたと口では申して居りますが、御命日ともなれば、矢張悲みは新らたに蘇ります。人様の前では明るくと努めて居りますものゝ、夜半の寢醒めに過去を憶ひ行く手を案じては泣きぬれて、獨り靜かに曉の鷄鳴をきくことが御座います。

誠に偽りのない告白といはねばならぬ、殊に十三回忌の所感には、

「人間はすべて自分の心で自分を束縛し、自分の心で自分の心を泣かせるのである。自分の道は自分で開拓する外無いと思へば、その開拓の道は精神即ち心で、その心の持方の如何により、光明の世界もあれば、暗黒の世界ともなる、人間は己の心に幸福だと思ふ時が眞の幸福だと思ふ。心に幸福だと感ずる時は、不足も不満も無くて萬物に對して感謝の念が湧き、枯れ果てた悲嘆の涙も今や神佛の有難き、御心の忝けなさに、感謝の涙が泉のやうに湧いて来る。

私は幸福だ……と叫び度い位胸は躍る。

自らを幸なる者と思ふ迄われ幾度か迷ひ來りし

何といふ尊とい文字だらう、自分は吉田絃二郎先生の夫人を逝くして、

「昨日は悟り今日は又迷ひ凡夫の淺間しき傷心の程御憫察たまはり度候」  
この氣持を話すと、

「先生、私はそれを幾十回幾百回繰かへしたか知れませんが」

誠にさうだらうと同情に堪へなんだ。

外には抜けるやうな強い降雨、しめやかに長い時間お話しして、今後時々お訪ねすることを約し、小著「人生を語る」を贈つて暇を告げた。

急に刑務官舎の親族を訪ひたくなり、俵に賃して行くと、そこには戦地の息子から航空便で病氣して相當永く治療を受けてゐることを知らして來たところだつた。

たちねの親の憂ひを思ひてはわれ病みたりと文にかき得ず

朝風に病衣の袖をなびかせてをろがみまつる東の空

斯うした事で遂にこの日は忘れられない、日記を認めることになつた。

### 中の三

四五日してから上野女史は、水蒸のあとも立派な禮狀を送られた。

「秋も日毎にふかまり朝夕はよほど冷氣をおぼえ参り候。過日は御多忙の中を御見舞を辱ふ致し恐れ入り申候。其上結構なる御高著までおめぐみにあづかり、重ねくの御厚志誠に有難く感謝申上候。(下略)」

よも山の話しに悟す御言葉はしみてうれしき秋雨の午後

御高著のめぐみをうけてわが嬉し秋の日あしのをしまるゝかな

かうした、悲しみと苦しみと悩みの三重苦にある人にこそ、精神的伴侶となつてあげるのが教家の眞使命だと考へさゝれた。

下

然るに何事ぞ翌月の或日數日の他行から歸ると、不在中の郵便物の中に、黒梓の一通がある、取る手遅しと見れば、「義姉菊枝十一月十六日腦溢血で逝く」との知らせだつた。餘りの急變に暫くは文字を凝視してゐた、自分の足許へも何かと迫つて來たやうな感じがして、急に世の中が暗くなつた、嗚呼合掌、問題の解決は唯これのみである。

## 一一 戦死者の遺族へ

一

〇〇さま。

いよゝ原隊其他の合同葬も済んで、懐かしい祖先の墓に最後の埋葬を終られたこと、思ひます。

御賢息が國家干城の本務に當り、戦場の花と散逝かれしことは、男子の本懐、意義深き名譽の戦死と讃えるは勿論であります。併し、亦靜かにお内佛の前に座られたとき、言ひ知れぬ涙の湧き出ること、否み難い凡情の尊さであります。茲には理智の世界を超越した、眞純さが躍動してゐるのです、止め度もなく流るゝ涙は拭はないでゐて下さい、その奥底から御親のみ名が乾して下さいます。

二

○○さま。

貴方と始めてお言葉を交したのは、忘れもしない。昨年十月一日の晩でした。鹿兒島西本願寺別院の書院で、出動將兵の家族互勵會の席でありました。その際男子側は少なかつたが、婦人側は部隊長夫人を始め、母たり妻たり娘たり、各方面の同じ思ひを抱く人々の一座であつて、未だ言葉を交さぬ先から、一種の親しさが漲つてゐました。

司會者の指令で私から息子の出動當時の所感を中心に、銃後國民の覺悟に涉りお話ししました。續いて貴方が同様のお感じを話されたのです、私は今まで單に知つてゐた貴方のお名前と其他の事情を承知しました。意外にも御賢息と私の息子の事情が能く似てゐたので、一層共鳴を覺えました。

貴方のお息子さんが、帝大出身の經濟學士であり、見習士官となり、其際實業方面に従事されてゐたのに、今次事變に應召出動北支に向はれたとの事で、その上お子供さんが生れて未だ日もたぬ處だつたさうです。令狀の知せを電話した時も、産婦には直接知らせないようにと、取次の者が出た積りで話すと、それが知らさぬ筈の産婦自身が電話にかゝ

つてゐたといふナンセンスがあつたとも話されましたな。戦地から通信には望遠鏡の管に彈丸がふれたたのお話もありました。

私の方の息子も帝大印哲を出てから、幹部候補を終り見習士官の肩書を獲て、今は千代田學園に奉仕してゐたのです、これとて矢張新婚生活は未だ三ヶ月にならずに應召したのでした、境遇を同じうする者は何んとなく親しさを覺えます。

あの晩お互に語り合つてゐると、荒馬を曳いて出られた息子の母御が、汽車に乗せられてゐる馬に合掌して伴と一緒におと温なしう行つてくれと頼んだといふ話も今に忘れない一つであります。

三

○○さま。

人間程横着な者はありませんよ、同じ戦況ニュースを聴くにしても。自分の伴の關係してゐる方面の知らせは一層注意深く聞漏さないようにします。他人の上の事は相當大きな事柄でも、只一應の驚きで終りますが、自分に關係があつたら一寸したことでも、大が

りに吹聴しようとしませう。佛は私共を有漏心の強い者だとお諭しになります、實際さうです。有漏とは煩惱のことです。穢れた私ごころです。併し亦、これあるが爲に人間相互が助かるのです。

私は息子の出動する時は、萬歳の叫びもさう高うは出せなかつたのです。

萬歳と叫ぶわが聲高からずあやしきものよ人の子の親

家族互助。この精神こそは家庭も國家も、畢竟この延長といつてよいではないでせうか。

## 四

〇〇さま。

風雨寒暑、それから一と戦争の新聞に接しては、一も二もなく速ぐ俵の上に思ひは走せませう、それに第一戦に出てゐては、音信も容易に來ない、手紙など書く暇もないが、書いて見ても未だ野戦郵便が開始されてない、このため思ひながら通信が出來なかつたと斷つて來たこともあります。それでも音信があると近くにゐるやうな氣持がします、たよりが無いと別の世界にでもゐる感じがします。

他人からお考へになつたら『何もお前の息子ばかりではない、高貴な御方さま迄御出動であるぞ』とお笑ひになるかも知れませぬが、そこが親馬鹿といはるゝ點で、亦そこに何んともいへぬ價值のあるところなんです。

〇〇さま。

この前は誠に妙な事がありました。南京攻略戦の前です。或朝未明に寢床の中で電燈の明りに、其日の新聞を讀まうと開きますと〇〇部隊の戦傷者の氏名が出てゐる少尉〇〇〇〇と五號活字、俵ではないかとハツと驚いて眼鏡をかけると、御賢息の氏名だつたので、さてはと驚きました。其の前日途中三十日も経た俵の葉書の檢印にこれまた〇〇と認が押してある、御賢息は野戦病院にゐるゝ事と思つてゐたが、併しさう同姓も多くある筈はないと不審に思つた。

こんな事があつた爲でせう。南京攻略が始まつたとニュースに知らされた。昭和十二年十二月十二日未明の夢に、或海岸通りの橋近い或家に、戦死者のお悔みに行き遺族の方に滔々と御法話を申上げてゐるのです、それがどうやら貴方のお宅のやうです。私は實際お宅

の町名も在場所も知らないのです、だから夢には明瞭しないのですそれで御法話だけは醒めてからも充分覚えておりました、

『吾等は泣けて來ます。泣きたいだけ泣きませう、その涙こそは私の愚痴を洗ふ、尊とい  
涙です……』

さうして醒めて見たら實際涙が流れてゐた。今の夢が尙も續けばよかつたと惜いやうな氣持がしました。

これと同時に伴は愈々今朝戦死したな、と考へました貴方にこの事をお知らせしようと思つたが、多忙のまゝ通信も怠りました。

## 五

〇〇さま。

その後ち二三日して市へ出たから、始めて貴家をお訪ねして、御佛前に拜禮し亦御家族へもお目にかゝると、何んぞ知らん御先代は、御生前から能く承知してゐる方で貴方がたがその御子孫だといふ事を知つて、今更の如く法縁の淺からざるものを感じました。

お寫眞やら戦地よりの音信、平素の言行何彼と承れば一申時代は私の兄息子と同窓七高は亦戦地に在る伴と同時らしいです。私が今迄全く知らなかつた方々に、慥に宿縁の結ばれてあつた事が氣付かれました。

戦地に在る者は皆な生還を歸せぬ事は同一でありますが、御賢息の貯金の事やら弟妹に將來の心得を申送らるゝなど、當人の覺悟は誰にも充分出來てゐるのです。生後唯二度より抱いたことのない愛兒を、臨末に『何も遺言はないが。今一度子供が見たい』ともらされたさうな誠に至情至極な發露であります。私共ではお蔭さまで北支より中支へ、其こそ南戦北闘、随分百難に打克つて、今日迄は無事に軍務に當つてゐますが、某部隊長の所感の詩の一句に『死生明日誰相識』で其日々々をお互に喜ぶことです。私方でも戦地で初任給を頂戴した時、その大半を早速親に宛て遠慮なく遣つてくれと、別に仔細は書いてはないが多年養育の親に、先づこの喜びを願とうといふ、氣持が充分味はるゝ、私はその子心に人知れず聲を呑んだ、あゝ親子の至誠は何んといふ尊いものでせう。

## 六



○○さま。

貴方が御賢息の戦傷死を原隊からき、更に未知の看護兵からの通信と、遺髪や爪、血の付いた恩賜の繻帯の破片を送つて來ても、現に眼に見ざる事とて、どこかに生きてゐたというて來はせぬかと考へたとお話だつたが、御無理のないことです。私共では多大な犠牲の拂はれた南京陥落後に、他から息子が無事であると知らして下さつてすら、本人の音信を受取る迄は、矢張心からなる安心が出來ませなんだ。かうした點は死生共に同一です。そこに凡情の動きが味はるゝではありませんか。

七

○○さま。

これ以上は愚痴の繰言になりますから申上すまい。

今さらに涙あらたや梅かほる

元來、豫て聽聞の通り、生者必滅、會者定離、何人がどうした死の縁を結んで居るか知れないのです。兎も角皇國の干城として其の大任に殉死されたは男子の本懐と申さねばな

らぬ。どうかお互に靜かに念佛の大道を辿り俱會一處の妙果を待得ることゝ致しませう。あゝお念佛です。念佛以上の慰安の道は地上には他に有りませぬ。

## 一二親ごゝろ

九〇

私の檀家の方ではあるが、帝大を卒へてそのまま官界に入り、警視廳を振出しに某縣の内務部長を最後にして、實業界に這入つてゐた、〇〇さんといふ方がありました。かうした業務上の關係で、聞法の機會が乏しかつた、親御さんは舊藩時代禪宗寺院に僧侶生活もした人で、廢藩後は還俗して、私の寺の重要な役を持つた信者の一人であつた。

さてその代議士經歷の其後銀行重役の〇〇さんが、永いこと病床に在つて、強度の神經衰弱にかゝり、色々考へさゝれて安眠を得られないで苦悶の日が続いた、かうした時に宗教のお話を承つてみたらと希望され、私に話に来てくれよと人傳てに申込まれた。

任地が鹿兒島の市中でもあり、今一つは本人自らの望みだらうか、或は側からの附け藥的ではなからうかとの疑惑もあり、それに其頃は法務期で閑散の時日がなく、稍時日を経ってから訪ねて行つた。

假寓といつても宏壯な住宅であつたが、病室へといふと、嚴格な性質の持主だけに、自ら應接室に出て來られた、成程永病人だとの感はあつたが、久淵の面語を喜び、それから現在の感想を語るに、今日迄の生活を細大漏らさず告白し、約一時間近くも語り續けた最後に、

「……自分は今まで、人間は正直に誠の道さへ履行して居れば衣食なんか粗末でもよい、お金なんといふものに、さう執着すべきではないと考へてゐた、然るに銀行事業に關係するやうになると、從來の考へに幾分の訂正を試みねばならず、それにしては、今若し萬一の日が來たとしたら、子女は澤山あり未だ將來の安定を得た者はなし、殊に男子は末子で未だ小學校に出たばかりだ、自分に萬一の日が來ても、子供達の一生を樂に暮さるゝよう、一人々々に遺産を與へてやりたい、こんな事を色々次から次へ考へる、晝夜心の安まる時もなく、これが自分の苦悶の一つです、毎晩ラジオ放送の終つてから、佛前に坐つて居ると、胸の煩悶も鎮まるやうだから、妹達にお寺で承つたお説教の内容を聽かしてくれと求めても、得心の出来るやうに話は出來ないと斷るので、あなたに御苦勞を願つたのです。

崇高な哲理や幽玄な教義は他日健康な日に拜聴致したい、けふは、自分の子女を思ふ遺産を興へたらなどの希望は、これが所謂、煩惱といふものでせう、この煩惱こそ往生の妨げだときまます、どうしてこれを止め得られますか、どうこれに處理してよいか、唯この一點を直截簡明に教示して下さい。

私はこの〇〇さんの火の出るやうな訴へに接してゐると、もうたまらなく眼頭に異状を覚えて來ました。

〇〇さん、有難う、私はようこそお訪ねしたと自ら嬉しく感じます、あなた自身にそれだけの求めがあるとは知らないで、側からの付け薬ではないかと、淺慮な思ひ迄加へてゐました。

〇〇さん、そのまゝでよいのですよ。あなたばかりぢやありません、親鸞聖人さまでさへ、

「誠に知んぬ、悲しき哉愚禿鸞、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近づくことを快しまず、恥づべし傷むべし」

と仰せられてゐます、さうした愛欲名利の心こそ凡夫の自體なんです、それが無くなつたり、止められるやうだつたら、親さまのお慈悲は最初からありますまい。

〇〇さん、あなたが子供さんを思はるゝ、その心の他にどこに親ごゝろがあるのですか、自らは要求もせない、子女の將來を心配してかゝる、それがそのまゝの親心でせう、それを取除いて別に親心はあり得ますまい。」

そこに居合せた嬢さんの一人に私はいつた。

「あんた方は、現在の親の御恩に充分感謝してゐなさるだらう、別に何程の遺産をとの望みをお持ちぢやありますまい」

「ハイ」と笑顔で返事してゐられた。

〇〇さんは、私の言葉を一句も聴き落さないといふ緊張の面持でゐられたが、驚いたやうに、

「自分は親鸞聖人は勿論、あなた方のやうな信仰のある方には、俗惡な自分共とは別な世界に生活されてゐるとのみ考へてゐました」

きゝながら私は自らが恥しくてならなかつた。

「只我等は随犯随懺で、犯したあとでまた悪かつたと、お懺悔が出来るか出来ぬかど、凡人生活と聊か違ふ位のもので、それもなか／＼容易に氣の付く私ではありません」と附けたした。

他日を約して別れたが、再度の日の遂に來ぬ先に、故人となつて仕舞はれた。

それ程、心配の種だつた相續者の末子も、一年の後には逝くなつた。

あゝ人間の一生、それは夢いあだ花の散り行くに等しいことが、今更ながら思はるゝ。

### 一三 流轉の常相

子に泣きし親も亦逝く

一

流轉は萬物の常相、諸法の定規、この嚴肅な支配の下には、何人と雖も反抗を許されてゐません。それに愚な私共は自分のみが除外例の特權でも獲たかのやうな考へでゐるから、足もとから鳥のたつやうな出來事が起ると、驚愕のあまり恥かしい態度を現さねばなりません。要は今一段心の奥底に、佛の御說法を聽聞させて置くことなんです。平素兎角に油斷がちに暮してゐる私に、色々の方から眞剣な注意を戴くことは、誠に有難いことなんです。

二

もう昨年の五月の或日、一面識のある隣町の學務係りで、濱田盛征さんといふ方から、

次のやうなお手紙を頂いた、濱田さんは永い間教育界にゐて、各地で小學校長の要職を経て、老後を自分の町で仕事に専念してゐられた人である。

『……實は私の四男で今度尋二になつた九歳である子供が足の傷から敗血症になり、二十五日目に百法手を盡しましたが、遂に死去致したのであります。平素利口で將來望みを囑してゐました上に。今度の病氣に多少手後れもある様に感じますので、どうも思ひ切れないのであります。家内などどうにもなれないのであります。』

私の内はこれまで神道でありましたので、神葬を致しましたが、床の上に一つの位牌ばかり淋しく立つてゐるのがたまらないのであります。佛教であると如來さまの懷に抱かれ、安らかに眠る様に感じますから、その様に致したいと思ひますが、葬式が神葬であり、先祖が神棚であるのに、改めて佛様にするが、それでよいものかと思ふのです。神棚は今のまゝにして置いてお寺参りだけ致すものか、迷うてゐる次第です。又何なりと私共の心を醫する修養法なり、著書なり御座いましたら御教示下さる様願ひます。昨年は八十三歳になる父が死にましたが、永病であつたせいいか、これ程までには悲しみませんでした、今

度はやるせがない様に感ずるのであります。

かうしたお尋ねに接しては、もう衷心から同憂の涙が浮び出るのであります。近くにお寺も少くないに殊に自分を名指しての尋ねに淺からざる御縁を感じ、二つの要點に對してお答へして置きました。

神道であらうと何であらうと、よし葬儀の式はどうであらうとも、佛縁の結ばれたことは確に逝くなられたお子さんの、唯一の親孝道が出来たこととなります。神棚も何もそのまゝにして、お寺参りをなさつて聊も差支へません。又修養書や信仰の本がないでもありませんが、そんな急場にピッタリ得心の出来る様な物も少なく、適當な文字が偶然に發見さるゝかどうかそれも疑問なんです。修養だ信仰だといつても、それは平素の準備です。急場へのぞんで、オイそれと妙薬はありません。

かうした際は心靜かにたゞお念佛を稱へて下さい。心ゆく迄佛名に接することです。そこに言ひ知れぬ、一大慰安が自然に獲られます。それも自然法爾として湧いて出て來るのです別に御参考に價せないかも知れませんが、私の小著を三四冊送りますと答へて置いた。

四五日して第二信が来ました。

「私の願ひを早速御聴き届け下さいまして、御玉章ぎんたまじょうに依り又御著書により御指導を給はりて誠に有難う御座いました。早速、隅々まで拜讀させて頂きましたおぼろげながら、信仰が見出された様な感が致します。けれども當分はまだ泣かねばなりませんまい泣くことが本當で御座いませう。

昨日は近くのお寺に参りました、御供養をして頂きました。これから度々御縁に預ることゝ存じます。これも御指導の賜と存じます……」

其後私は文筆だけでは充分ではないと思ひ、子供さんを御縁に心からなる聞法者の集會を催して貰ふやうに話してあつたが、公職を持つ方でもあり、何れはさうした時日をと、お互に約してゐましたが、遂にさうした機會は無くなつてしまつた。

### 三

今年の二月だつたか、自分が持病の床に在る日、新聞廣告の黒枠の中に、濱田さんの急死を讀んで。言ひ知れない思ひに襲はれました。何んでも町内の或地の常會に列して、開

會五六分して挨拶中に發病して、翌日は早や泣いて別れた愛兒の後を追うて、再び語り得ぬ人となられたのである。

あゝ、流轉は萬物の常相、諸法の定規私は再びかう書いてこの感を置き、茲に始めて生前の文通を公開して讀者の参照に供ふ。

□

今もう一人これに似寄つた方がある。實業家で鹿兒島西本願寺別院に關係の深い津曲慶造さんである。氏と始めて語つたのは、今回の支那事變の起つた當初、出征家族互勵會の席であります。

私が二男を出動させてゐる關係上、列席した時、私情が能く似てゐて、學校事情のため幹部候補生として入隊し、後に今回應召されたこと、共に一人の幼兒の親となつてゐることを忘れがたい親心の共通とて話は同一軌道に乗つてゐた。

その後息子さんが戦死され、看護兵の某から、臨終の有様から、『今一度子供を抱いてみたい』との遺言やら、傷口に使用した恩賜の繻帶に血の附いた物も送つて來てゐた、そ

れでも親としては、どこからか間違ひだつたと取消が来はせぬかと、空頼みに思はれると話されておりました。

遣つた若いお嫁さんと初孫を、大阪の親許に置くか自宅へ呼ぶか、こんなことにも幾分苦勞があつたらしかつた。

かうした人間苦の淋しいなかに暮してゐられたが、この春大正會館に於て新任の別院輪番等の歓迎會を催しその席上津曲氏が、會員代表で祝辭を述べ、三人各別に歓迎の言葉を終ると共に其儘着席したのかと思ふ間に、急激の發病で遂に手當も何の効なく、人間最後の其時が到來したのであります。

列席の人々は今更の如く、無常迅速の現狀に驚くばかりだつたといふ。場所や事柄には不足はないとしても、餘りに儚ない最後にあきるゝばかりであつた。

自分は新聞廣告を讀んだ時、水は流るゝ遷流は宇宙の實際だと、同憂のお念佛が口をついて漏れて來ました。

昭和十六年十二月十五日印刷  
昭和十六年十二月二十五日發行

◎四拾錢

著作權  
發行者

藤

等

影

鹿兒島縣万世町

印刷者

藤

澤 淨 圓

京都市下京區壬生川五條下ル

配給元

日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二ノ九

發行所

同

朋

舎

京都市下京區壬生川五條下ル  
郵便京郵六六四八番

|    |
|----|
| 42 |
| 91 |



終

